

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

## 研究進捗状況報告書の概要

### 1 研究プロジェクト

学校法人名	学校法人東北芸術工科大学	大学名	東北芸術工科大学
研究プロジェクト名	生きる力を育む芸術・デザイン思考による創造性開発拠点の形成		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

### 2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究の目的は、小中高生を対象として「生きる力」を育むための「芸術思考」および「デザイン思考」にもとづく教育方法を総合的に研究し確立することである。方法論として注目したのはワークショップ(WS)であり、その活用の方向づけに芸術思考とデザイン思考を採用した。芸術思考とは、実現すべき理想的なビジョンを生み出す創発的な思考であり、デザイン思考とは、他者と協働して創造的に問題解決を行うための思考である。これによって、芸術大学ならではの「生きる力」を育む教育方法論を確立する。そのために、WS の効果測定方法と知性の可視化方法、芸術思考、芸術思考とデザイン思考の統合を目指している。

初年度は、こども芸術大学プロジェクトの成果と課題を整理し、基本的柱となる芸術・デザイン思考の理論化と創造性開発拠点(やまがた芸術学舎)の形成に努める。同時に、芸術・デザイン思考にもとづく身体・社会(対人、内省)・空間知能の3プログラムの開発に着手する。2年次には、論理数学・言語知能の2プログラムの開発に着手する。3年次は、先行した3プログラムである身体・社会・空間知能を統合するプログラムの開発に着手し、各プログラムの実践・検証とともに中間報告を行う。4年次から5年次にかけては、身体・社会・空間・論理数学・言語の5領域を統合するプログラムの開発を行う。また、開発したプログラムの学校教育への展開を図る。最終年度は、研究の持続と改良を行いつつ、次世代に向けて創造性開発研究モデルを構想し、公開シンポジウムの開催、最終総括研究会を実施する。

### 3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

小中学生を対象とするワークショップ(WS)は、2013年9月から2016年3月まで美術・デザインによるWSを44プログラム開発し延べ618名が参加した。その分析によって、(1)行動観察によるWSの形成的評価方法の提案、(2)多重知能の主観的推定にもとづくWS特性の平面配置による可視化、(3)多重知能の行動観察にもとづくWS特性のレーダーチャートによる可視化、(4)WS参加者への多重知能アンケートにもとづく自己の成長感の推定と感情評価——等の成果を得ている。

これらから得た主な知見は、(a)WSの行動観察メモをもとに多重知能を定量化したレーダーチャートを作成したこと、(b)多重知能の主観評価アンケートをもとに主成分分析で平面配置したこと——等によってWSの多重知能的な特性を可視化できた。これによって、(A)必ずしもWS設計者の意図と合致しないこと、(B)比較的低かった内省的・対人的知能を強めるために参加者間で学びあうWSデザインの必要性が指摘されたこと——等が主な成果である。

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

**平成 25 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」  
研究進捗状況報告書**

1 学校法人名 学校法人東北芸術工科大学      2 大学名 東北芸術工科大学

3 研究組織名 創造性開発研究センター

4 プロジェクト所在地 山形県山形市上桜田 3-4-5

5 研究プロジェクト名 生きる力を育む芸術・デザイン思考による創造性開発拠点の形成

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
片上義則	デザイン工学部/創造性開発研究センター	副学長・デザイン工学部長/センター長

8 プロジェクト参加研究者数 40 名

9 該当審査区分 理工・情報      生物・医歯      人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

【学内】			
研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
片上 義則	副学長・デザイン工学部長/センター長	多重知能理論によるデザイン思考の研究	全体統括/[デザイン思考担当]/(理論 G)
木原 正徳	芸術学部長・教授	多重知能理論による創造性の研究	統括 PJ/[芸術思考担当]/学校教育 WG
三橋 幸次	デザイン工学部・教授	多重知能理論によるデザイン思考の研究	統括 PJ/[デザイン思考担当]/(理論 G)
柚木 泰彦	デザイン工学部・教授	多重知能理論によるデザイン思考の研究	統括 PJ/[デザイン思考担当]/(理論 G)
古藤 浩	教養教育センター・教授	多重知能理論によるデザイン思考の研究	統括 PJ/論理 WG
遠藤 節子	こども芸術大学・校長	多重知能理論による創造性の研究	統括 PJ/[こども芸術大学連携担当]/(理論 G)
有賀 三夏	創造性開発研究センター研究員・講師	多重知能理論による芸術思考の研究	統括 PJ/[芸術思考担当]/(理論 G)

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

澤口 俊輔	デザイン工学部・准教授	多重知能理論によるデザイン思考の研究	統括 PJ/[デザイン思考担当]/身体 WG
青山 ひろゆき	芸術学部・准教授	多重知能理論による創造性の研究	統括 PJ/[芸術思考担当]/学校教育 WG
深井 聡一郎	芸術学部・准教授	多重知能理論による創造性の研究	統括 PJ/[芸術思考担当]/学校教育 WG
吉賀 伸	芸術学部・講師	多重知能理論による創造性の研究	統括 PJ/[芸術思考担当]/学校教育 WG
渡部 桂	デザイン工学部・准教授	多重知能理論によるデザイン思考の研究	統括 PJ/[デザイン思考担当]/(理論 G)
齋藤 祥子	こども芸術大学・教頭	多重知能理論による創造性の研究	統括 PJ/[芸術思考担当]/学校教育 WG
矢作 鹿乃子	こども芸術大学・幼児教育士	多重知能理論による創造性の研究	統括 PJ/[芸術思考担当]/学校教育 WG

## 【学外】

上條 雅雄	オフィス観音崎 代表	創造性開発における領域統合の理論	統括 PJ(理論 G)
栗山 健	学研教育総合研究所 所長	創造性開発における領域統合の理論/論理・数学的知能領域からの創造性の開発	統括 PJ(理論 G)/論理 WG/論理 WG
阪井 和男	明治大学法学部・教授	創造性開発における領域統合の理論/創造性開発における分析方法の研究/論理・数学的知能領域からの創造性の開発	統括 PJ(理論 G・分析 G)/論理 WG
戸田 博人	(株)富士通ラーニングメディア・エグゼクティブマネジメントスペシャリスト	創造性開発における分析方法の研究	統括 PJ(分析 G)
本間 真	(株)ディスコ事業開発部・次長	創造性開発における分析方法の研究	統括 PJ(分析 G)
内藤 隆	(株)シーエスアップ・表取締役	創造性開発における分析方法の研究/身体的知能領域からの創造性の開発	統括 PJ(分析 G)/身体 WG
寺尾 敦	青山学院大学・准教授	創造性開発における分析方法の研究/論理・数学的知能領域からの創造性の開発	統括 PJ(分析 G)/論理 WG
中込 敏寛	(株)日本スウェーデン福祉研究所・代	身体的知能領域からの創造性の開発	身体 WG

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

	表取締役		
森 憲一	(株)サードステージカンパニー・代表取締役	空間的知能領域からの創造性の開発/社会的知能領域からの創造性の開発	空間 WG/社会 WG
庄司 博幸	(株)サードステージエデュケーション・代表取締役	言語的知能領域からの創造性の開発	社会 WG
永谷 研一	(株)ネットマン・代表取締役社長、武雄市教育委員会アドバイザー	言語的知能領域からの創造性の開発	社会 WG
坪田 康	京都大学人間・環境学研究所・助教	言語的知能領域からの創造性の開発	言語 WG
山本 康治	東海大学短期大学部児童教育学科・教授	言語的知能領域からの創造性の開発	言語 WG
原田 康也	早稲田大学法学学術院・教授/日本英語教育学会会長	言語的知能領域からの創造性の開発	言語 WG
長南 博昭	前山形県教育委員会委員長	外部評価	学識研究者からの外部評価
渡部 泰山	山形大学大学院教育実践研究科教授	外部評価	学識経験者からの外部評価
渡邊 斉	南陽市立荻小学校 校長	学校教育との連携協力者	学校教育との連携
張崎 正裕	学校法人東谷学園 天童東幼稚園 副園長	学校教育との連携協力者	学校教育との連携
遠藤 正俊	山形市立第六中学校	学校教育との連携協力者	学校教育との連携
須田 一成	長井市立長井南中学校	学校教育との連携協力者	学校教育との連携
(共同研究機関等) 該当なし。			

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
---------------	-------	-------	------------

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

多重知能理論による創造性の研究	デザイン工学部・准教授	西澤 高男	統括 PJ/空間 WG
-----------------	-------------	-------	-------------

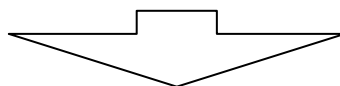
(変更の時期:平成 26 年 3 月 31 日)

多重知能理論による創造性の研究	教養教育センター・教授	池田 正	統括 PJ/[芸術思考担当]/学校教育 WG
-----------------	-------------	------	------------------------

(変更の時期:平成 27 年 3 月 31 日)

多重知能理論による創造性の研究	教養教育センター・教授/創造性開発研究センター・副センター長	片桐 隆嗣	全体統括/[芸術思考担当]/社会 WG
-----------------	--------------------------------	-------	---------------------

(変更の時期:平成 27 年 6 月 28 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
デザイン工学部・准教授	デザイン工学部・准教授/創造性開発研究センター研究員	早野 由美恵	統括 PJ/[デザイン思考担当]/(理論 G)
芸術学部・講師	芸術学部・講師/創造性開発研究センター研究員	柳田 哲雄	統括 PJ/[芸術思考担当]/学校教育 WG
(株)カラーコード・代表取締役	(株)カラーコード・代表取締役	浅井 由剛	空間 WG/社会 WG

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

## 11 研究進捗状況(※ 5枚以内で作成)

### (1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究の目的は、小中高生を対象として「生きる力」を育むための「芸術思考」および「デザイン思考」にもとづく教育方法を総合的に研究し確立することである。方法論として注目したのはワークショップ(WS)であり、その活用の方向づけに芸術思考とデザイン思考を採用した。芸術思考とは、実現すべき理想的なビジョンを生み出す創発的な思考であり、デザイン思考とは、他者と協働して創造的に問題解決を行うための思考である。これによって、芸術大学ならではの「生きる力」を育む教育方法論を確立する。そのために、WS の効果測定方法と知性の可視化方法、芸術思考、芸術思考とデザイン思考の統合を目指している。

初年度は、芸術的環境で幼児の感性を養う実践研究「こども芸術大学プロジェクト」の成果と課題を整理し、基本的柱となる芸術・デザイン思考の理論化と創造性開発拠点(やまがた芸術学舎)の形成に努める。同時に、芸術・デザイン思考にもとづく身体・社会(対人、内省)・空間知能の3プログラムの開発に着手する。2年次には、論理数学・言語知能の2プログラムの開発に着手する。3年次は、先行した3プログラムである身体・社会・空間知能を統合するプログラムの開発に着手し、各プログラムの実践・検証とともに中間報告を行う。4～5年次は、身体・社会・空間・論理数学・言語の5領域を統合するプログラム開発を行い、開発したプログラムの学校教育への展開を図る。最終年度は、研究の持続と改良を行いつつ、次世代に向けて創造性開発研究モデルを構想し、公開シンポジウムの開催、最終総括研究会を実施する。

### (2) 研究組織

創造性開発研究センター(センター長・片上義則)を設置した。ここに、学内研究者17名、学外研究者21名、研究協力者3名を組織し、理論化を進めるグループと分析担当グループを配置し、多重知能に対応する5つのWG(身体WG、空間WG、社会WG、言語WG、論理WG)を組織し、さらに学校教育グループと外部評価グループを配置した。

### (3) 研究施設・設備等

やまがた芸術学舎(山形市)

### (4) 進捗状況・研究成果等 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び\*を付すこと。

#### <現在までの進捗状況及び達成度>

本項については、研究拠点の整備、理論、WS実施、分析の3つに分けて報告する。

まず、**研究拠点の整備**については平成25年度にやまがた芸術学舎を整備し、現在までの利用人数は延べ3,200人にのぼっている。したがって、達成度は100%と推定される。

次に、**理論**の進捗状況については、申請準備段階の2012年から芸術的思考のアイデアが検討された。それを芸術思考と名づけてはじめて提案されたのは2012年7月28日に岡山大学で開催された第71回次世代大学教育研究会(学会発表\*180-182)である。2012年10月6日には明治大学で開催された情報コミュニケーション学会第10回研究会(論文\*44, 45、学会発表\*178, 179)し、同発表は第10回研究会優秀発表賞(受賞\*207)を受賞した。

東北芸術工科大学を芸術思考の研究拠点とすべく、第79回次世代大学教育研究会(学会発表\*168-177)を2013年2月1日「芸術思考シンポジウム in 山形」として開催したのを契機に、電子情報通信学会思考と言語研究会(論文\*43、学会発表\*167)、情報コミュニケーション学会(論文\*40, 44)、次世代大学教育研究会(学会発表\*148)と、先行研究を進めてきた。

その後、2013年7月の平成25年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受けたのち、創造性開発研究センター主催の学内外共同研究者対象キックオフ研究会(東北芸術工科大学、2013年10月4日)を皮切りに、次の学会・研究会、(1) 創造性開発研究センターシンポジウム「小中高生の生きる力を育む芸術思考の可能性(東北で挑戦する、創造性開発)」(東北芸術工科大学、2013年12月15日)(学会発表\*139)、(2) 第91回

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

次世代大学教育研究会(東北芸術工科大学、2014年2月1日)(学会発表\*201-133)、(3) 情報コミュニケーション学会第15回研究会(東北芸術工科大学、2014年11月8日)(論文\*18-20、学会発表\*102-104)、(4) 第108回次世代大学教育研究会(博多、2015年8月22日)(学会発表\*79)、(5) 第109回次世代大学教育研究会(長崎、2015年9月12日)(学会発表\*78)、(6) 情報コミュニケーション学会第12回全国大会(東北芸術工科大学、2015年2月28日)(論文\*12-183, 184-187、学会発表\*87-194, 195-198、受賞\*203, 204)、(7) 電子情報通信学会思考と言語研究会「芸術思考・デザイン思考、及び思考と言語一般」をテーマとした研究発表(論文\*2、学会発表\*75)とパネルディスカッション「オーガナイズドセッション: 芸術思考とデザイン思考」(明治大学、2016年1月30日)(論文\*3、学会発表\*74)、(8) 情報コミュニケーション学会第13回全国大会(東北芸術工科大学、2016年2月28日)(論文\*1、学会発表\*74)、(9) 第115回次世代大学教育研究会(東北芸術工科大学、2016年3月24日)(学会発表\*63-70)——などを主催・共催した。

以上のように、理論の進捗状況については、顕著な進展が見られており、当初の想定を超える成果と理論的応用への展開が得られているため、100%を達成しているものと推定される。

第3点のWS実施は、別添資料1の表「実施済みのワークショップ一覧」のように2013年9月から2016年3月まで実施分を集計すると、美術・デザインによる44のプログラムが開発され、延べ618名の参加を得た。実施はセンターとともに小中学校など協力機関でも行われ、「生きる力」を育むWSプログラム開発の充実・向上を幅広い視点で図るための連携が進められ、分析結果をもとにWS内容の改善と進展を図り、継続的な企画・運営体制が整えられた。以上により、WS実施における達成度については、90%を達成していると推定される。

第4点の分析における第1の成果は、行動観察によるWSの形成的評価方法(論文\*28、学会発表\*103, 109)を提案したことである。講師と参加者の行動観察によって9WS(別添資料「2014夏のワークショップ祭」を参照)を分析した結果、博物的・言語的・身体運動的・空間的知能の4つは十分に活性化され、残りの論理数学的・音楽的・内省的・対人的知能の4つの活性化が低いという特徴が見出された。内省的・対人的知能を強めるには、個別ワークから脱却し参加者間で学びあうWSをデザインすることが提案され、その戦略としてeラーニング支援体制構築を応用する有効性が指摘された。

第2は、多重知能の主観的推定にもとづくWS特性の平面配置による可視化(学会発表\*102)である。これは、WS担当者と見学者による多重知能の主観評価アンケートをもとに主成分分析し平面上に配置することで、獲得知能の可能性を整理できる可能性を示した。

第3は、多重知能の行動観察にもとづくWS特性のレーダーチャートによる可視化(論文\*43、学会発表\*167)である。8つのWSの行動観察メモをもとに多重知能を定量化したレーダーチャートを作成し、WSの多重知能的な特性を可視化することによって、改善の方向としてインストラクショナル・デザインの導入によるWS開発を提案した。加えて、感情アンケートによる定性評価によってすべてのWSが高い評価を得ていたことが判明した。

第4は、WS参加者への多重知能アンケートにもとづく自己の成長感の推定と感情評価(論文\*13)を行なったことである。これは、WS参加者への多重知能アンケートを実施し、自己の成長感(主観的な知能の向上)を明らかにしたものである。特に、博物的知能または論理数学・音楽的知能の向上が見られたが、必ずしもWS設計者の意図と合致しているわけではなかった。さらに、終了時の自己の成長感と正の相関をもつことが示された。

第5に、多重知能アンケートとともに主要5因子性格検査のアンケートも同時に取る準備ができたため、対象とする数はまだ少ないものの両者の相関をみるできるようになったことから、新しい仮説を生成できる可能性(センター勉強会\*299)が示されている。以上から、分析における達成度については60%と推定される。なお、昨年度までの活動の詳細は報告書(図書\*46, 51)に詳しく報告されている。

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

### <特に優れた研究成果>

#### ・継続的なWSプログラムの企画と運営

2013年9月から2016年3月まで美術・デザインによるWSを44プログラム開発し延べ618名の小中学生が参加した。

#### ・芸術思考の研究と応用

芸術思考の研究に対して、情報コミュニケーション学会から第10回研究会優秀発表賞(2012)(受賞\*207)、および同第12回全国大会研究奨励賞(2015)(受賞\*203, 204)が授与された。最近では、新規事業開発を解釈する優れた方法になりうること(論文\*3, 5, 15, 図書\*48, 学会発表\*84, 89, 97, 受賞\*203, メディア(記事・放送等)\*249, 253)が示されている。

#### ・デザイン思考の研究と応用

2016年度に新設予定の東桜学館中学校・高等学校から本センターへの依頼(2015年6月)を受け、6年間にわたる総合的な学習の時間「未来創造プロジェクト」カリキュラムへのデザイン思考の適用を目的としたカリキュラム検討会議がデザイン思考分科会によって始められた。同時に東北芸術工科大学と山形県教育委員会が2015年11月26日に協定が結ばれた。東桜学館をモデル校とし、その成果を山形県内の各高等学校に展開する予定である。カリキュラム検討会議は2016年4月末現在まで9回実施しており、4月には開学まもない東桜学館で2回の授業(出張講義)を実施し反省会を行った。このように、デザイン思考教育のカリキュラム化は、東桜学館のスーパーサイエンスハイスクール等への道を開くことが期待される。

### <問題点とその克服方法>

#### ・研究体制におけるプロジェクト役割の見直し

当初、多重知能から5つを取り上げてそれぞれに特化したWSを段階的に設計・実施するという演繹的アプローチによって計画案を策定した。ところが、デザイン工学部と芸術学部の学部が設置されていることを反映し、デザイン思考分科会と芸術思考分科会の2つが先行設置された。このため、2分科会が分離したままで個別に実施可能なWSを計画・運営する結果となった。しかし、2分科会の分離発足は逆に各分科会のスモールスタートを容易にしたため、3年間で41プログラムの実施という成果を得たといえる。

そこで本センターでは、当初に発想した多重知能にもとづくプロジェクト役割にこだわらず、2分科会にもとづいたプロジェクト役割に変更した。このことは、多重知能を全体として包括的に育むという意味で合理性がある。なぜなら、芸術という行為そのものが多くの多重知能を同時に活性化させるからである。さらに、本プロジェクトのキーワードの一つである「生きる力」が、多重知能理論の立場からいうと包括的であることから自然なアプローチともいえよう。

残された問題は2分科会の協調・連携である。最近、2分科会が車の両輪のように相互に協調しながら活動する機会が得られた。東北芸術工科大学において2016年3月24日開催の第115回次世代大学教育研究会(学会発表\*63-70)である。ここで、各分科会に属する内部研究員が外部研究員とともに公開研究会を開いて議論を行った。これによって、WS担当者たちとの分科会を超えた振り返りがなされ、協調的な活動へと発展することが期待される。

#### ・教授設計(Instructional Design: ID)導入の指摘への対応

当初から計画されていたWS設計の導入が後追いになっており、このことが分析結果からも、ID設計を入れる必要があると指摘されている(論文\*18, 学会発表\*103)。これに対応するため、授業担当者による多重知能の活性化の事前・事後アンケートを実施し、WS設計の狙いが多重知能的にどうなされ、どんな結果かという設計者による主観評価「多重知能分析シート」を導入する。さらに、これによって判明したWS設計者の意図を、参加者への多重知能アンケートと比較することにより、WS設計者にとっての経験学習サイクルを回すことが期待される。

### <研究成果の副次的効果(実用化や特許の申請など研究成果の活用の見直しを含む。)>

芸術思考の理論の適用については、その後も精力的に研究が進められ、最近では企業に



法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

における新規事業開発(論文\*5, 14、図書\*48、学会発表\*84, 89, 97、受賞\*203, 204)が芸術思考によってよく理解されることが示されている。

#### <今後の研究方針>

##### ・ハーバード大学との連携

最終年度に向けて、国際会議の開催を東京と山形において計画している。多重知能理論の提唱者であるハワード・ガードナー(ハーバード大学)との緊密な連携を図り、本センターの研究成果を国際的にも評価されるものへ高めることを目指す。

##### ・生きる力の解明

これまでは WS をどのような効果をもたらす活動であるかを把握するために、多重知能理論や SAN 感情測定スケールなどの枠組みを用いて測定することに主力を注いできた。今後はこれらの測定量と「生きる力」との関係性を明らかにする。

その大まかな方向について想定する方針は次のとおりである。「生きる力」は、IQ や学力テストで計測される認知能力とは異なり、性格的な特性や創造性、自己認識、意欲、忍耐力、自制心、メタ認知ストラテジー、社会的適性、回復力と対処能力など、非認知能力といわれるものからなる(中室牧子、『「学力」の経済学』、ディスカヴァー・トゥエンティワン、pp. 84-89, 2015年6月18日)。本研究ではすでに性格的な特性と創造性を取り上げていることに加え、多重知能理論で扱ういくつかの知能についても非認知能力と関係することから、「生きる力」が本研究によって育まれる可能性を示すことを目指したい。

##### ・新規事業開発への適用と展開

芸術思考による新規事業開発の解釈については一応の発展を得たが、今後はデザイン思考との統合的解釈についての研究を進めていく予定である。

#### <今後期待される研究成果>

こども芸術大学の協力を得て実施される WS においては、卒園生のリピーターが一定程度継続的に参加する傾向がある。つまり、参加者個人を特定しつつ同一人物が複数の WS を数年にわたって経験することになる。これはコホートの縦断分析を可能とすることを意味する。これを今後の新たな研究課題として取り上げたい。

#### <自己評価の実施結果及び対応状況>

研究拠点の整備は 100%達成された。

次に、理論の進捗状況は、理論における達成度は顕著な進展が見られており、当初の想定を超える成果と理論的応用への展開が得られているため、100%の達成度と推定される。

第 2 点の WS 実施は、本センターのもとで WS を継続実施できたことは、デザイン工学部、芸術学部、および、こども芸術大学の 3 つが学部や大学の枠を超えた活動によって大学における教育研究のありかたにも新しい刺激となりつつある。さらに、学内にとどまらず山形県内外の教育機関において WS が実施できていることは、創造性開発研究センターの活動とその意義が広く認知されることにつながっている。今年度には新しく 2 つの小学校、(1)山形市立第一小学校、(2)鶴岡市立朝陽第二小学校——での出張 WS が決定している。以上により、WS 実施の達成度は、90%を達成していると推定される。

第 3 点の分析は、芸術系大学が実施する小中学生対象の WS の妥当性をはじめに検討した。小学生を対象とする WS を 2013 年 3 月 24 日に試行し、これから小学生対象 WS の妥当性を検討した結果、「『物語る場』をつくることを通して生成体験を導く、『生成のメディア』となりうるもの」で、「『創造性教育』の実践として、意義深いもの」であり、小学生の WS が創造性研究にかなうと評価された(図書\*51:[山本一成,「世界を組み替える物語 ～スタンプづくりワークショップを通した子どもの生成体験についての考察～」, pp. 59-62(審査無)])。

まとめると、WS の事前事後の短期的な感情の変化、事前事後の多重知能の変化、短期的には変化しない性格検査の各データを系統的に取得し分析することができるようになり、今後

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

の研究に進展が期待できる。以上から、分析における達成度については、60%と推定される。

#### ・研究費の年度配分について

研究費については、3 カ年を通して執行率が低く抑えられた。その理由は、(1)効果測定アンケートを実施するにあたって、そのアンケートの内容が個人のプライバシーに関わる可能性に配慮し、WS参加者、及びその保護者との信頼関係を築いたのちに行うことの必要性に考慮したためである。3年間の活動の成果、当初予定していた効果測定が実施可能となった。今後は、実績に応じて委託料の年度配分を考慮していく。ここで、(1)の委託料の増額配分は、平成27年度から系統的に取得できるようになった各種アンケートのアンケート解析の委託費である。これによって年度予算に占める委託費の割合が平成26年度2.2%、平成27年度4.2%だったものを、平成28年度予算で21.3%へと大幅に増額し配分した。

さらに、3種のアンケート、(1)感情のWS事前・事後の比較、(2)多重知能の事前・事後の比較、(3)比較的に長期的に安定している主要五因子性格検査——が実施できる体制が整ったため、アンケート収集・分析の費用を今年度から重点配分した。今後、多重知能アンケートから学習習慣の分析による生徒指導のシステム構築を図る予定である。

#### ・国際シンポジウム等の開催

最終年度には、多重知能理論の提唱者であるハワード・ガードナー氏(ハーバード大学)など、多重知能理論の研究者を招いてのシンポジウムを開催し、これまでの研究成果を学内外に発表する。また今年度より、それに向けての準備を始める。

#### <外部(第三者)評価の実施結果及び対応状況>

学識研究者の外部評価委員として調書に記載済みの長南博昭氏(前山形県教育委員会委員長)、渡部泰山氏(元山形大学大学院教育実践研究科教授)から第三者としての外部評価をお願いした(添付資料を参照のこと)。主な課題は次のようにまとめられる。

#### ・研究内容の改善

「予算執行率の低位な状況を鑑みたとき、研究が必ずしも順調に進捗しているとは言えない」と指摘を受けた。ワークショップを特徴とした研究のため、学内研究員による企画から実行にわたる労務負担が結果的に低支出での研究進捗につながったと言え、低位の予算執行率と研究の実行度とは必ずしも相関しないと考える。「事務と研究が一体的に運営できなかったこと」については、「研究プロジェクトの目的も方向性に収斂された研究実践、成果として積み重ねられ、課題分析・評価を踏まえた共同研究の高みへと共通認識に至るよう改善を図る。

国際シンポジウムの開催について、「来年度早々に実現」を図るよう指摘された。その理由として、「多重知能理論の実証性を検証する必要がある」こと、「ハーバード大学との将来的なつながりをつけ連携を進める」こと、「多重知能理論の良さを理解する」ことが挙げられている。そこで、今年度中にペンステート大学(ペンシルバニア州)のミンディ・コンハーバー氏を招聘すべく検討を開始したい。氏はガードナー氏の右腕で、ハーバード大学の多重知能研究「プロジェクト・ゼロ」の重要ポストを担っている。ミンディ氏の招聘によって、最終年度のガードナー氏招聘への先鞭準備をつけ、ハーバード大学との交流・連携を図る。

これらとともに、やまがた藝術学舎をさらに活用しつつ「単に学術的価値にとどまることなく、学校教育の現場と密接に接続しつつ、広く一般市民、社会全般にも周知、還元されていく手立て、研究の質と方向性」を確保できるよう研究体制を推進する。

#### ・研究費の配分等への反映

予算の積み残しについては、自己評価の項で述べたように、すでに今年度予算に委託費の大幅な増額を組み入れて改善を図っているが、さらに、導入済みのiPadを活用したアンケート取得の効率化と高度化を図りたい。第二の国際シンポジウム開催については、早々の実現とハーバード大学との連携を図るため、ミンディ氏の招聘予算の増額を検討する。

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- |                |                |              |
|----------------|----------------|--------------|
| (1)芸術思考        | (2)デザイン思考      | (3)生きる力      |
| (4)多重知能理論      | (5)ワークショップ     | (6)主要5因子性格検査 |
| (7)SAN感情測定スケール | (8)多重知能分析アンケート |              |

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには\*を付すこと。

#### <雑誌論文>

1. \*戸田博人・阪井和男・森憲一・森貴子,「企業業績に直接貢献する教育プログラムのIDモデルによる分析」, 情報コミュニケーション学会, 第13回全国大会発表論文集, pp. 108-109, 2016年2月28日。(査読無)
2. \*阪井和男・有賀三夏・村山真理・戸田博人・大島伸矢,「因子分析による多重知能分析アンケートの開発」, 電子情報通信学会, 思考と言語研究会(TL)「芸術思考・デザイン思考、及び思考と言語一般」, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 115, No. 441, pp. 47-52, 2016年1月22日。(査読無)
3. \*有賀三夏・村山真理・秋山ゆかり・戸田博人・阿部明典・原田康也・阪井和男,「オーガナイズドセッション:芸術思考とデザイン思考」, 電子情報通信学会思考と言語研究会「芸術思考・デザイン思考、及び思考と言語一般」, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 115, No. 441, pp. 53-58, 2016年1月22日。(査読無)
4. 原田康也・森下美和,「日本人英語学習者のインタラクション(相互行為)を通じた自律的相互学習プロセス解明に向けて」, 日本認知科学会第32回大会発表論文集, pp. 952-960, 日本認知科学会, 2015年9月18日。(査読無)
5. \*秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男,「新規ビジネスを生み出す芸術思考」, 株式会社技術情報協会,『～研究成果の早期事業化を実現する～ 新規事業テーマの探し方、選び方、そして決定の条件』, 第5章, 第3節, pp. 301-309, 2015年7月31日。(査読無)
6. 原田康也,「人工知能の特異点を遡って:2001年宇宙の旅」, 情報処理, Vol.56, No.8, pp.753-755, 情報処理学会, 2015年7月15日。(査読有)
7. 有賀三夏,「アートセラピー」, 芸術工学会誌, Design Research No.68, pp.38-41, 2015年5月16日。(査読有)
8. 遠藤智子・河村まゆみ・横森大輔・原田康也,「日本人英語学習者による定型表現の使用と習得:言いよどみとクロージングのケース」, 日本英語教育学会第44回年次研究集会発表論文集, pp.9-16, 早稲田大学情報教育研究所, 2015年3月31日。(査読有)
9. 中村智栄・新井学・原田康也,「日本人英語学習者の関係節文理解におけるプロソディー情報の影響」, 日本英語教育学会第44回年次研究集会発表論文集, pp.61-68, 早稲田大学情報教育研究所, 2015年3月31日。(査読有)
10. 村上優・市毛愛子・有賀三夏,「次世代型地域子育て支援環境構築に関するパイロット研究ーその構成概念と環境構築を中心にー」, 大阪芸術大学短期大学部紀要論文, No.39, 2015年3月24日。(査読無)
11. 深井聡一郎,「AGAIN-ST 第4回展『置物は彫刻か?』」, 東北芸術工科大学紀要第22号, 2015年3月。(査読無)
12. \*原田康也・森下美和,「言語教育と教養教育を統合する芸術思考:『人工知能からサイバーパンクまで』再考」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会論文集, pp. 112-119, 2015年2月28日。(査読無)

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

13. \*古藤浩・片桐隆嗣, 「アンケート調査と多重知能理論による芸術系ワークショップ参加者の主観的成長感」, 情報コミュニケーション学会第 12 回全国大会発表論文集, pp. 76-79, 2015 年 2 月 28 日. (査読無)
14. \*秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男, 「新規事業を生み出す芸術思考」, 情報コミュニケーション学会第 12 回全国大会発表論文集, pp. 60-69, 2015 年 2 月 28 日. (査読無)
15. \*村山真理・有賀三夏・池田知之, 「芸術思考を育む『場』の構築—大学間連携による授業実践の報告」, 情報コミュニケーション学会第 12 回全国大会発表論文集, pp. 120-127, 2015 年 2 月 28 日. (査読無)
16. 中島進・永谷研一, 「タブレット活用した子どもが主役になる授業スタイルの模索」, 情報コミュニケーション学会第 12 回全国大会発表論文集, pp. 92-98, 2015 年 2 月 28 日. (査読無)
17. 原田康也・森下美和, 「大学英語教育における知識と運用の統合: 文法知識の運用課題と実体的コミュニケーションの場の提供」, 電子情報通信学会技術報告, vol. 114, No. 385, pp. 19-24, 2014 年 12 月 13 日. (査読無)
18. \*阪井和男・戸田博人・内藤隆・有賀三夏・片桐隆嗣, 「行動観察を用いた多重知能理論にもとづく芸術系ワークショップの評価と特徴」, 情報コミュニケーション学会, 第 15 回研究会発表論文集, pp. 3-12, 2014 年 11 月 8 日. (査読無)
19. \*村山真理・有賀三夏・阪井和男, 「生きる力を育む芸術思考」, 情報コミュニケーション学会第 15 回研究会発表論文集, pp. 17-20, 2014 年 11 月 8 日. (査読無)
20. \*古藤浩, 「芸術活動による知能開発の方向性と可能性」, 情報コミュニケーション学会第 15 回研究会発表論文集, pp. 13-16, 2014 年 11 月 8 日. (査読無)
21. 坂本美枝・半田純子・宍戸真・阪井和男, 「カランメソッドを用いた英語発話練習: オンライン・マンツーマン指導」, 教育工学会, 第 30 回全国大会(岐阜大学), 2014 年 9 月 21 日. (査読有)
22. 森下美和・原田康也, 「日本人英語学習者の Wh 疑問文運用能力に関する予備調査: 心理言語学的研究に向けて」, 日本認知科学会第 31 回大会発表論文集, pp. 525-527, 日本認知科学会, 2014 年 9 月 18 日. (査読無)
23. 坂本美枝・半田純子・宍戸真・阪井和男, 「カランメソッドを用いた英語発話練習: オンライン・マンツーマン指導」, 教育工学会, 2014 年日本教育工学会第 30 回全国大会講演論文集, pp. 831-832, 2014 年 9 月 12 日. (査読無)
24. 阪井和男・戸田博人・栗山健, 「場を介在するスキル学習を統合する概念モデルの提案」, 情報コミュニケーション学会, 第 13 回研究会発表論文集, pp. 10-17, 2014 年 7 月 5 日. (査読無)
25. 戸田博人・香山裕子・小田有希子, 「学習履歴分析による e-Learning 学習者特性調査」, 日本 e-Learning 学会学会誌, Vol. 14, pp. 42-52, 2014 年 7 月. (査読有)
26. 原田康也・森下美和, 「日本人英語学習者の英語疑問文産出にみられる傾向: 自動化のための訓練の必要性」, 電子情報通信学会技術報告, vol. 114, No. 100, pp. 43-48, 電子情報通信学会, 2014 年 6 月 14 日. (査読無)
27. 山田寛章・石井雄隆・原田康也, 「日本人大学生の英語作文からの特徴量の自動抽出に向けて: 予備実験と今後の課題」, 電子情報通信学会技術報告, vol. 114, No. 100, pp. 55-60, 2014 年 6 月 14 日. (査読無)
28. \*阪井和男, 戸田博人, 内藤隆, 有賀三夏, 片桐隆嗣, 「行動観察を用いた多重知能理論にもとづく芸術系ワークショップの評価と特徴」, 情報コミュニケーション学会研究報告, Vol. 11, No. 3, pp. 3-12, 2014. (査読無)
29. 内藤隆, 「青少年の運動実践を促進する『ワークショップ型授業』の開発に関する調査研

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

- 究」(2013年度笹川スポーツ研究助成採択研究), SSF スポーツ政策研究, 第3巻1号, pp. 306-315, 2014. (査読有)
30. 横森大輔・遠藤智子・河村まゆみ・鈴木正紀・原田康也, 「日本語を第一言語とする英語学習者の比較的自発的な発話におけるフィルターに見られるいくつかの特徴」, 日本英語教育学会第43回年次研究集会発表論文集, pp.89-96, 早稲田大学情報教育研究所, 2014年3月31日. (査読有)
31. 阪井和男・永井優子・齊藤博美・今道正博, 「東日本大震災ニュースソースとタブレット型電子デバイスのクラウド活用による科学的思考法ワークショップにおける教育効果の解析」, 情報コミュニケーション学会第11回全国大会発表論文集, pp. 132-139, 2014年3月2日. (査読無)
32. Yasunari Harada, Mayumi Kawamura, Daisuke Yokomori, and Tomoko Endo, " 'That's all. Thank you.' : Emergence of Formulaic Protocols among Japanese EFL Learners," SEMDial 2013, DialDam, Proceedings of the 17th Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue, Raquel Fernandez and Amy Isard (eds.), Amsterdam, 16-18 December 2013, University of Amsterdam, pp. 197-198, 2013年12月17日. (査読無)
33. 鍋井理沙・原田康也, 「日本人英語学習者の英語リスニング;ディクテーション課題における非強勢要素の聞き取りと書き起こし」, 電子情報通信学会技術報告, vol. 113, No. 354, pp. 71-76, 2013年12月7日. (査読無)
34. Chie Nakamura, Manabu Arai and Yasunari Harada, "The use of verb subcategorization information in processing garden-path sentences: A comparative study on native speakers and Japanese EFL learners," Studies in Language Sciences, pp.43-69, 言語科学会, 2013年11月28日. (査読有)
35. 横森大輔・遠藤智子・河村まゆみ・鈴木正紀・原田康也, 「日本語母語話者の英語発話にみられるフィルターの使用ストラテジー」, 日本認知科学会第30回大会発表論文集, pp. 12-17, 2013年9月5日. (査読無)
36. 首藤佐智子・原田康也, 「残念な言語現象—ポライトネスの耐えられない矛盾」, 日本認知科学会第30回大会発表論文集, pp. 661-666, 2013年9月5日. (査読無)
37. 森下美和・原田康也, 「日本人英語学習者の言語産出における動詞の下位範疇化情報の使用:統語的プライミング実験データの質的再分析」, 日本認知科学会第30回大会発表論文集, pp. 502-505, 2013年9月5日. (査読無)
38. 阪井和男, 「電子教科書サービスに関する実証実験報告書「思考の可視化プロジェクト(VOT: Visualization of Thinking)」(科学的な態度で東日本大震災のニュースソースを読み解く ~帰納推論による科学的思考法の入門ワークショップ~)」, 日本ユニシス, 2013年8月29日. (査読無)
39. 原田康也・森下美和, 「日本人英語学習者の言語処理と言語運用能力:Versant English Test のスコアを中心に」, 電子情報通信学会技術報告, vol. 113, No. 174, pp. 1-6, 2013年7月27日. (査読無)
40. \*阪井和男, 「ワークショップの教育方法論としての可能性」, 情報コミュニケーション学会誌, 巻頭言, Vol. 9, No. 1, pp. 2-3, 2013年7月15日. (査読無)
41. 阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之, 「談話分析によるハイパフォーマンスチームのイノベーションプロセスのモデル化 ~会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析~」, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 113, no. 82, pp. 1-6, 2013年6月7日. (査読無)
42. 阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一・中川貴之, 「感情に焦点をあてたハイパフォーマンスチーム特性の交流分析による可視化 ~会社を超えた半年間の実践的人材

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

育成研修後の振り返り分析～, 2013年度サービス学会第1回国内大会講演論文集, pp. 57-64, 2013年4月10日。(査読無)

43. \*阪井和男・内藤隆, 「感情によるワークショップ効果測定法の提案 ～創造的なワークショップでは課題提起者の感情はどう変化するか～」, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 112, no. 442, pp. 13-18, 2013年2月15日, (査読無).

44. \*阪井和男・有賀三夏, 「生きる力を育む芸術思考ー知的能力の統合的な育成を目指してー」, 情報コミュニケーション学会研究報告(第10回研究会), Vol. 9, No. 2, pp. 14-19, 2012年10月6日, (査読無).

45. \*有賀三夏, 「アートが発信ー創作活動から見える表現の可視化ー」, 情報コミュニケーション学会研究報告(第10回研究会), Vol. 9, No. 2, pp. 34-37, 2012年10月6日, (査読無).

### <図書>

46. \*東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 『2015年度創造性開発研究センター研究活動報告書(SOZO2015)』, 2016年5月17日.

47. 戸田博人, 『大学におけるeラーニング活用実践集ー大学における学習支援への挑戦2ー』, ナカニシヤ出版, 2016年1月30日.(共著)

48. \*秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男, 「新規ビジネスを生み出す芸術思考」, 株式会社技術情報協会, 『～研究成果の早期事業化を実現する～ 新規事業テーマの探し方、選び方、そして決定の条件』, 第5章, 第3節, pp. 301-309, 2015年7月31日.(共著)

49. 有賀三夏, 『本当はすごい“自分”に気づく 女子大生に超人気の美術の授業』, 幻冬舎, 2015年7月29日.

50. 渡部泰山, 『教育の森通信ー届け、教室へ』, 書肆犀, 2015年7月7日.(共著)

51. \*東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 『2014年度創造性開発研究センター研究活動報告書(SOZO2014)』, 2015年4月30日.

52. 青山ひろゆき, 画集『青山ひろゆきー耀ー』, 喜多方市立美術館, 2015年4月25日.

53. 青山ひろゆき, 「洋画演習5『青山ゼミ(たきやまコラボ)』」, 東日本広域の大学間連携による教育の質保証・向上システムの構築“つばさ”プロジェクト報告書, 山形大学教育開発連携支援センター, 2015年3月31日.

54. 阪井和男, 『ドラッカー(人・思想・実践)』, ドラッカー学会監修, 三浦一郎・井坂康志編著, 文眞堂, pp. 161-171, 2014年10月1日.(共著(分担執筆:第9章))

55. 有賀三夏, 「Art in Lifeー人生に芸術をどう使おうか?ー 『つながる教育、つながる未来』 教育改革×ソーシャルの力」, 学校広報ソーシャルメディア活用勉強会, 2014年8月29日.

56. 渡部泰山, 評伝「斎藤秀一」「砂山健」「松田甚次郎」, 『やまがた再発見・第一巻』, 山形新社編, 2014年7月3日.(共著)

57. 青山ひろゆき, 「参加、体験、そして相互作用「教養ゼミナール(ワークショップ)での試みと成果」, 東北芸術工科大学紀要第21号, 2014年3月31日.

58. 原田康也, 『外国語運用能力はいかに熟達化するか:言語情報処理の自動化プロセスを探る』, 横川博一・定藤規弘・吉田晴世(編著), 松柏社, 2014年3月25日.(共著(分担執筆(第11章担当)))

59. 渡部泰山, 「届け、教室へー死をみとる体験ー」, 『切り抜き速報教育版ー特集・こころの授業、いのちの重さを感じる』, ニホン・ミック発行, 2013年8月1日.(共著)

60. 渡部泰山, 「芸術の純度の高さ」, 『夭折の作家・永山一郎美術作品集～記憶の棲む場

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

所』, LEGENDS 発行, 2013 年 7 月.(共著)  
 61. 渡部泰山, 『東北近代文学事典』, 勉誠出版, 2013 年 6 月 10 日.(共著)  
 62. 澤口俊輔, 「こども芸術の家 震災後の<こども=未来>を考える プロジェクト・メイキング・プロセス」, pp.68-77, 2013 年 3 月 11 日.

### <学会発表>

63. \*原田康也・森下美和, 「街場の言語科学:芸術思考とデータサイエンス」, 第 115 回次世代大学教育研究会, 東北芸術工科大学, 2016 年 3 月 24 日.  
 64. \*戸田博人・阪井和男, 「教授設計の視点とワークショップへの導入」, 第 115 回次世代大学教育研究会, 東北芸術工科大学, 2016 年 3 月 24 日.  
 65. \*庄司博幸, 「創造性を鍛える遠足 ー何が創造性を鍛えるのかー」, 第 115 回次世代大学教育研究会, 東北芸術工科大学, 2016 年 3 月 24 日.  
 66. \*村山真理・有賀三夏・池田智之, 「多様性は芸術思考を育むか」, 115 回次世代大学教育研究会, 東北芸術工科大学, 2016 年 3 月 24 日.  
 67. \*柚木泰彦, 「デザイン思考の探究型学習への適用を目指して」, 115 回次世代大学教育研究会, 東北芸術工科大学, 2016 年 3 月 24 日.  
 68. \*渡辺桂・早野由美恵, 「デザイン思考ワークショップの実践報告」, 115 回次世代大学教育研究会, 東北芸術工科大学, 2016 年 3 月 24 日.  
 69. \*青山ひろゆき, 「芸術思考ワークショップの実践報告」, 115 回次世代大学教育研究会, 東北芸術工科大学, 2016 年 3 月 24 日.  
 70. \*戸田博人・阪井和男, 「教授設計の視点とワークショップへの導入」, 115 回次世代大学教育研究会, 東北芸術工科大学, 2016 年 3 月 24 日.  
 71. 原田康也・森下美和, 「日本人英語学習者のインタラクション(相互行為)を通じた自律的相互学習プロセス解明を目指して:アクションカメラ・ウェアラブルカメラの選定と運用」, 日本英語教育学会第 46 回年次研究集会, 早稲田大学, 2016 年 3 月 12~13 日.  
 72. 原田康也・富田英司・森下美和, 「国際交流ルーブリックの開発:海外研修プログラムの評価測定基準策定に向けて」, 日本英語教育学会第 46 回年次研究集会, 早稲田大学, 2016 年 3 月 12~13 日.  
 73. 原田康也・森下美和, 「外国語でのインタラクション(やりとり)に見られる言語能力の創発と自律的相互学習」, ワorkshop『やりとりの中の言語能力:外国語スピーキング活動の評価・実践・データ分析をめぐって』, 九州大学, 2016 年 3 月 7 日.  
 74. \*戸田博人・阪井和男・森憲一・森貴子, 「企業業績に直接貢献する教育プログラムの ID モデルによる分析」, 情報コミュニケーション学会, 第 13 回全国大会, 大阪電気通信大学(大阪府寝屋川市), 2016 年 2 月 28 日.  
 75. \*阪井和男・有賀三夏・村山真理・戸田博人・大島伸矢, 「因子分析による多重知能分析アンケートの開発」, 電子情報通信学会思考と言語研究会「芸術思考・デザイン思考、及び思考と言語一般」, 2016 年 1 月 30 日.  
 76. \*有賀三夏・村山真理・秋山ゆかり・戸田博人・阿部明典・原田康也・阪井和男, 「[パネル討論]オーガナイズドセッション:芸術思考とデザイン思考」, 電子情報通信学会思考と言語研究会, 明治大学, 2016 年 1 月 30 日.  
 77. 原田康也・森下美和, 「日本人英語学習者のインタラクション(相互行為)を通じた自律的相互学習プロセス解明に向けて」, 日本認知科学会第 32 回大会(OS10)オーガナイズドセッション:相互作用(インタラクション)を通じた英語の学習効果に関する認知科学的観点からの検討, 千葉大学, 2015 年 9 月 18 日.

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

78. \*阪井和男・有賀三夏・戸田博人・大島伸矢, 「多重知能分析アンケートと生活環境アンケートを用いた重回帰分析と構造方程式モデリングによる行動特性の抽出」, 第109回次世代大学教育研究会, メルカつきまち(長崎), 2015年9月12日.
79. \*阪井和男・有賀三夏・戸田博人・大島伸矢, 「因子分析による多重知能分析アンケートの開発」, 第108回次世代大学教育研究会, ディスコ西部支社(博多), 2015年8月22日.
80. 原田康也・首藤佐智子・森下美和, 「インタラクションを通じた自律的相互学習:マイクは発言者としての役割を自他に明示することで学習者の発言を促す」, 第107回次世代大学教育研究会, 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス, 2015年7月11日.
81. 阪井和男・宮原俊之, 「eラーニングにおけるコーチング ～ラーニングコンシェルジュの発想と現状～」, 第106回次世代大学教育研究会, 北海学園大学(札幌市), 2015年6月27日.
82. Yasunari Harada & Miwa Morishita, "Integration of research and learning in language learning: data collection and phonological loop enhancement," The 18th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing, Kyung Hee University, Seoul, 2015年5月22日.
83. 阪井和男, 「創造的グループ思考:交流制約法(TCoM) ～2時間でできる課題探究と解の創出～」, 第104回次世代大学教育研究会, メルカつきまち(長崎市), 2015年4月18日.
84. \*秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会研究奨励賞「新規事業を生み出す芸術思考」, 2015年3月23日.
85. 原田康也・森下美和, 「インタラクションを通じた英語の自律的相互学習:カメラは今・ここを映すことで学習を促す」, 日本英語教育学会第45回年次研究集会, 早稲田大学, 2015年3月7日.
86. 坂本美枝・半田純子・宍戸真・阪井和男, 新田目夏実, 「英語アウトプット活動における学習者支援:感情的要素から導かれる方略」, 日本英語教育学会第45回年次研究集会, 早稲田大学, 2015年3月7日.
87. \*原田康也・森下美和, 「言語教育と教養教育を統合する芸術思考:『人工知能からサイバーパンクまで』再考」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会, 東北芸術工科大学, 2015年3月1日.
88. \*古藤浩・片桐隆嗣, 「アンケート調査と多重知能理論による芸術系ワークショップ参加者の主観的成長感」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会, 東北芸術工科大学, 2015年2月28日.
89. \*秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男, 「新規事業を生み出す芸術思考」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会, 東北芸術工科大学, 2015年2月28日.
90. \*村山眞理・有賀三夏・池田知之, 「芸術思考を育む「場」の構築ー大学間連携による授業実践の報告」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会, 東北芸術工科大学, 2015年3月1日.
91. 中島進・永谷研一, 「タブレット活用した子どもが主役になる授業スタイルの模索」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会, 東北芸術工科大学, 2015年2月28日.
92. 戸田博人, 「デザイン思考とクリエイティブ・グループシンキングとの接合」, 明治大学サービス創新研究所成果発表会, 明治大学, 2015年2月22日.
93. 阪井和男, 「創造的グループ思考「交流制約法(TCoM)」 ～2時間でできる課題探究と解の創出～」, 明治大学サービス創新研究会, 明治大学, 2015年2月22日.
94. 阪井和男・井出祥子・原田康也・片桐恭弘, 「インタラクションによる意図せざる結果の招



法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

- 来:発話行為理論の破たんと場における意図と解釈の創発」, 第 102 回次世代大学教育研究会, ディスコ西部支社(博多), 2015 年 2 月 21 日.
95. 庄司博幸, 「R.エプスタイン『自己管理者としてのスキナー』に学ぶ科学的自己管理の方法」, 第 65 回教育臨床学研究会例会, 学習力創造アカデミー, 2015 年 2 月 21 日.
96. 原田康也・森下美和, 「共同学習による同調と自動化: 応答練習におけるプロトコルの創発」, 第 101 回次世代大学教育研究会, 琉球大学法文学部, 2015 年 1 月 10 日.
97. \*秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男, 「新規ビジネスを生み出す芸術思考」, 第 101 回次世代大学教育研究会, 琉球大学法文学部, 2015 年 1 月 10 日.
98. 阪井和男, 「場による意図せざる結果 ～「当事者間の了解」に関する無限後退問題の打ち切り～」, 場の言語学研究会(, 科研費挑戦的萌芽研究「場の言語学の構築: 場と意味の創発」), 早稲田大学, 2014 年 12 月 21 日.
99. 原田康也・森下美和, 「大学英語教育における知識と運用の統合: 文法知識の運用課題と実体的コミュニケーションの場の提供」, 電子情報通信学会思考と言語研究会, 大阪電気通信大学寝屋川駅前キャンパス, 2014 年 12 月 20 日.
100. 阪井和男・戸田博人・栗山健, 「場の効果と場を介在するスキル学習」, 第 100 回次世代大学教育研究会, 愛媛大学(松山市), 2014 年 12 月 13 日.
101. 星加良司・戸田博人, 「法改正に対応した企業としての合理的配慮とは? — 障害者と共に働く職場づくりを目指した研修プログラム—」, e-Learning awards 2014, 2014 年 11 月 14 日.
102. \*古藤浩, 「芸術活動による知能開発の方向性と可能性」, セッション 1「芸術思考 1」, 情報コミュニケーション学会第 15 回研究会, 東北芸術工科大学, 2014 年 11 月 8 日.
103. \*阪井和男・戸田博人・内藤隆・有賀三夏・片桐隆嗣, 「行動観察を用いた多重知能理論にもとづく芸術系ワークショップの評価と特徴」, セッション 1「芸術思考 1」, 情報コミュニケーション学会第 15 回研究会, 東北芸術工科大学, 2014 年 11 月 8 日.
104. \*村山真理・有賀三夏・阪井和男, 「生きる力を育む芸術思考」, セッション 1「芸術思考 1」, 情報コミュニケーション学会第 15 回研究会, 東北芸術工科大学, 2014 年 11 月 8 日.
105. Kazuo SAKAI, Hiroto TODA and Ken KURIYAMA, "Conceptual Model Integrating Skill Learnings Mediated by 'BA'", Workshop on Higher Education for the Next Generation 2014 in Malaysia, Higher Education for Next-Generation on Creation and Emergence of the Knowledge, Malaysia-Japan International Institute of Technology, 31 Oct. 2014.
106. 渡部泰山, 「日中戦争に反対し獄死した洞門僧がいた — 平和と民主主義を唱え続けたエスペランティスト齊藤秀一」, 現代宗教研究会, 名古屋市ホテル・ウエスト, 2014 年 10 月 13 日.
107. 阪井和男, 「社会生態学(知の新領域を開く)」, 文眞堂, 『ドロッカー(人・思想・実践)』, ドロッカー学会, 第 9 章, pp. 161-171, 2014 年 10 月 1 日.
108. 森下美和・原田康也, 「日本人英語学習者の Wh 疑問文運用能力に関する予備調査: 心理言語学的研究に向けて」, 日本認知科学会第 31 回大会ポスター2+フラッシュトーク, pp. 2-25, 名古屋大学, 2014 年 9 月 19 日.
109. \*阪井和男・戸田博人・内藤隆・有賀三夏・片桐隆嗣, 「行動観察を用いた多重知能理論にもとづく芸術系ワークショップの評価と特徴」, 第 97 回次世代大学教育研究会(長崎市), 2014 年 9 月 13 日.
110. 坂本美枝・半田純子・宍戸真・阪井和男, 「カランメソッドを用いた英語発話練習: オンライン・マンツーマン指導」, 2014 年日本教育工学会第 30 回全国大会, 岐阜大学,

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

2014年9月12日.

111. 原田康也・森下美和, 「技術(スキル)としての英文法(その6):自動化訓練プログラム開発のためのデータ収集」, 言語研究アソシエーション辞書プロジェクト第2期第5回会議, ちよだプラットフォームスクウェア 5F 会議室 503, 2014年8月29日.
112. 原田康也・森下美和, 「技術(スキル)としての英文法(その5):アルゴリズム体操+データ収集 = 自動化訓練プログラム」, 第96回次世代大学教育研究会, ディスコ 東北支社会議室, 2014年8月2日.
113. 坂本美枝・半田純子・宍戸真・阪井和男, 「カラン・メソッドを使用したオンライン英会話活動は何をもたらすか:学習効果と学習姿勢への影響」, 第96回次世代大学教育研究会, ディスコ(仙台), 2014年8月2日.
114. 原田康也・森下美和, 「技術(スキル)としての英文法(その4):文法的冗長性の活用訓練へ」, 第95回次世代大学教育研究会, 神戸学院大学有瀬キャンパス, 2014年7月12日.
115. 阪井和男・富田英司・坪田康・原田康也・森下美和, 「パネルディスカッション:教材作成とデータ収集・分析の多様なツール」, 第95回次世代大学教育研究会, 神戸学院大学有瀬キャンパス, 2014年7月12日.
116. 阪井和男・戸田博人・栗山健, 「場を介在するスキル学習を統合する概念モデルの提案」, 情報コミュニケーション学会第13回研究会, 2014年7月5日.
117. 河村まゆみ・遠藤智子・横森大輔・原田康也, 「自律的英語学習環境におけるプロトコルの創発」, 場の言語学ワークショップ「コミュニケーションの創発」, 早稲田大学8号館3階会議室, 2014年6月22日.
118. 阪井和男, 「イノベーション創発の数理モデル」, 早稲田大学情報教育研究所, 場の言語学ワークショップ「コミュニケーションの創発」, 2014年6月22日.
119. 原田康也・森下美和, 「日本人英語学習者の英語疑問文産出にみられる傾向:自動化のための訓練の必要性」, 電子情報通信学会思考と言語研究会・早稲田大学情報教育研究所共催研究会, 早稲田大学, 2014年6月21日.
120. 山田寛章・石井雄隆・原田康也, 「日本人大学生の英語作文からの特徴量の自動抽出に向けて:予備実験と今後の課題」, 電子情報通信学会思考と言語研究会・早稲田大学情報教育研究所共催研究会, 早稲田大学, 2014年6月21日.
121. 阪井和男・戸田博人・栗山健, 「スキル学習のプロセスモデル ~野中のSECIモデルとカーネマンの2つのシステムを統合するモデルの提案~」, 第94回次世代大学教育研究会, スマイルホテル函館, 2014年6月14日.
122. Nakamura, Chie, Arai, Manabu, Harada, Yasunari & Hirose, Yuki, "L2 learners' use of verb subcategorization information in processing filler-gap dependencies," 第14回日本第二言語習得学会年次大会(J-SLA2014), 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス, 2014年5月31日. (2014年度J-SLA 優秀口頭発表賞)
123. 戸田博人, 「学習履歴分析によるe-Learning 学習者特性調査」, 教育ITソリューションEXPO 公開セミナー, 2014年5月21日.
124. Miwa Morishita & Yasunari Harada, "Why do you think it is so difficult for the Japanese students to ask questions in English?: Cognitive Difficulty of Producing Question Sentences for Japanese Learners of English," The 16th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing, Kyung Hee University, Seoul, 2014年5月9日.
125. Miwa Morishita, Franklin Chang & Yasunari Harada, "Structural Priming and Lexical Boost in Early L2 Learners," AAAL, 2014年3月24日.
126. Yasunari Harada & Miwa Morishita, "Japanese EFL Learners' Cognitive Difficulty in

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

- Producing English Question Sentences,” AAAL, 2014年3月24日.
127. 内藤隆, 「青少年の運動実践を促進する『ワークショップ型授業』の開発」, 芸術思考研究会, 明治大学グローバルフロント 7F C4 会議室, 2014年3月21日.
128. 阪井和男, 「パフォーマンスで能力は測れるか? ~動機のマネジメントと活きた現場のKPIの発見~」, NPO 法人 人材育成マネジメント研究会, ICT 利活用教育分科会, 2014年3月15日.
129. 阪井和男・永井優子・齊藤博美・今道正博, 「東日本大震災ニュースソースとタブレット型電子デバイスのクラウド活用による科学的思考法ワークショップにおける教育効果の解析」, 情報コミュニケーション学会第11回全国大会(長崎大学), 2014年3月2日.
130. 森下美和・原田康也, 「日本人英語学習者の構文処理: 疑問文の統語形態論的複雑性」, 日本英語教育学会第44回年次研究集会『『グローバル人材育成』を考える』, 日本英語教育学会, 早稲田大学, 2014年3月2日.
131. 遠藤智子・河村まゆみ・横森大輔・原田康也, 「日本人英語学習者の定形表現習得の難しさについて」, 日本英語教育学会第44回年次研究集会『『グローバル人材育成』を考える』, 日本英語教育学会, 早稲田大学, 2014年3月1日.
132. \*浅井由剛・有賀三夏・栗山健・阪井和男・庄司博幸・坪田康・戸田博人・寺尾敦・内藤隆・中込敏寛・永谷研一・本間真・森憲一・山本康治, 公開討論「芸術思考ワークショップをデザインする」, 第91回次世代大学教育研究会, 2014年2月1日.
133. \*原田康也, 「芸術思考と言語ワークショップ: 思考と言語と身体と」, 第91回次世代大学教育研究会「芸術思考をデザインする」, 東北芸術工科大学, 2014年2月1日.
134. 原田康也・鍋井理沙, 「技術としての英文法 (3): リスニングにおける文法知識の活用調査」, 第90回次世代大学教育研究会, 次世代大学教育研究会主催, NPO 法人人材育成マネジメント研究会共催, 沖縄産業支援センター, 2014年1月11日.
135. Yasunari Harada, Mayumi Kawamura, Daisuke Yokomori, and Tomoko Endo, “That’s all. Thank you.”: Emergence of Formulaic Protocols among Japanese EFL Learners,” SemDial 2013, The 17th Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue, DialDam, University of Amsterdam, 2013年12月17日.
136. Chie Nakamura, Manabu Arai and Yasunari Harada, “Use of Verb Subcategorization Information in L2 Sentence Processing,” Workshop on Linguistic Analyses of Foreign Language Learning: Automatization in Real-Time Comprehension and Production in conjunction with The 15th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing, Waseda University, 2013年12月15日.
137. Risa Nabei and Yasunari Harada, “Comprehension of unstressed elements in English sentences by Japanese learners of English,” Workshop on Linguistic Analyses of Foreign Language Learning: Automatization in Real-Time Comprehension and Production in conjunction with The 15th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing, Waseda University, 2013年12月15日.
138. Tomoko Endo, Daisuke Yokomori, Mayumi Kawamura, Masanori Suzuki and Yasunari Harada, ““That’s all. Thank you.”: A case of naturally-occurring cooperative learning in Japanese EFL classrooms,” Workshop on Linguistic Analyses of Foreign Language Learning: Automatization in Real-Time Comprehension and Production in conjunction with The 15th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing, Waseda University, 2013年12月15日.
139. \*奥田修史・阪井和男, 「未来に求められる芸術思考」, 東北芸術工科大学創造性開発研究センターシンポジウム「小中高生の生きる力を育む芸術思考の可能性(東北で挑

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

- 戦する、創造性開発)」、2013年12月15日。
140. 鍋井理沙・原田康也、「日本人英語学習者の英語リスニング;ディクテーション課題における非強勢要素の聞き取りと書き起こし」,電子情報通信学会思考と言語研究会,早稲田大学,2013年12月14日。
141. 阪井和男、「ドラッカーはなぜマネジメントを 発明したのか? ~ドラッカーの社会生態学~」,日本ケーブルテレビ連盟信越支部,平成25年度日本ケーブルテレビ連盟信越支部講演会,ホテルメトロポリタン長野,2013年12月11日。
142. 原田康也、「自己評価・相互評価とプロジェクト管理:自己肯定感向上を通じた動機付けの実践」,第89回次世代大学教育研究会,次世代大学教育研究会主催,NPO 法人人材育成マネジメント研究会共催,愛媛大学,2013年12月7日。
143. 阪井和男・永井優子・齊藤博美・今道正博,「東日本大震災のニュースソースと電子デバイスを活用した科学的思考法の入門ワークショップにおける教育効果」,第89回次世代大学教育研究会,愛媛大学(愛媛県松山市),2013年12月7日。
144. Kazuo Sakai, Takashi Naito, Kenichi Mori, Takako Mori, Shuji Harada, Takayuki Nakagawa, "Fluctuation of Innovations Characterizing the Activities of High-Performance Teams - Visualization of Innovation Processes in terms of Innovation Diagram -", Hawaii University, and Meeting on Higher Education for the Next Generation, ICHE2013: International Conference on Higher Education for the Next Generation in Honolulu 2013, Hawaii University, Manoa Campus, Nov. 22, 2013.
145. 戸田博人・香山裕子・西村りさ・三橋朋子・小田有希子・是永綾子,「学習履歴分析によるe-Learning コースタイプ別学習者特性調査」,日本e-Learning学会,2013年度(10周年記念)学術講演会,2013年11月22日。
146. 阪井和男、「次世代大学の使命と 未来を担う若者たち」,明治大学社会イノベーション・デザイン研究所,河北新報社(仙台市),2013年9月28日。
147. 原田康也、「グローバル人材養成ギブス:コミュニケーション能力涵養を主体とする大学英语教育」,第86回次世代大学教育研究会,創成館高等学校,2013年9月21日。
148. \*阪井和男・有賀三夏、「近代教育制度の根源的問題とその処方箋としての『芸術思考』」,第86回次世代大学教育研究会,創成館高等学校(長崎県諫早市),2013年9月21日。
149. 首藤佐智子・原田康也、「残念な言語現象—ポライトネスの耐えられない矛盾」,日本認知科学会第30回大会ポスター発表,玉川大学視聴覚センター,2013年9月14日。
150. 森下美和・原田康也、「日本人英語学習者の言語産出における動詞の下位範疇化情報の使用:統語的プライミング実験データの質的再分析」,日本認知科学会第30回大会ポスター発表,玉川大学視聴覚センター,2013年9月14日。
151. 横森大輔・遠藤智子・河村まゆみ・鈴木正紀・原田康也、「日本語母語話者の英語発話にみられるフィルターの使用ストラテジー」,日本認知科学会第30回大会口頭発表,玉川大学視聴覚センター,2013年9月12日。
152. Yasunari Harada and Miwa Morishita, "Syntactic Priming Effects Revisited: Reconsidering Potential Priming Effects in Interactional Tasks by Japanese EFL Learners," Cross-linguistic Priming in Bilinguals: Perspectives and Constraints, Huize Heyendael, Radboud University Nijmegen, 2013年9月10日。
153. Chie Nakamura, Manabu Arai and Yasunari Harada, "Priming of an initially adopted structure in L2 processing," 19th Architectures and Mechanisms for Language Processing (AMLaP 2013), Aix-Marseille University, Marseille, France, 2013年9月2日。
154. 阪井和男・内藤隆、「ハイパフォーマンsteamの活動から見出された適応型イノベ

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

- ーション・サイクル」, 第 85 回次世代大学教育研究会, メルカつきまち(長崎市), 2013 年 8 月 17 日.
155. 内藤隆, 「ワークショップ理論の整理 – 身体ワークショップの開発に向けて」, 第 85 回次世代大学教育研究会, メルカつきまち(長崎市), 2013 年 8 月 17 日.
156. 原田康也・森下美和, 「日本人英語学習者の言語処理と言語運用能力: Versant English Test のスコアを中心に」, 電子情報通信学会思考と言語研究会・MAPLL 2013 共催研究会, 関西学院大学梅田キャンパス, 2013 年 8 月 3 日.
157. 阪井和男, 「成果を出す秘訣としての集中と解放の原理」, 第 84 回次世代大学教育研究会(明治大学), 2013 年 7 月 6 日.
158. Yasunari Harada, "Global Human Resource Development' in Japan and Theory of Knowledge in International Baccalaureate," ICEL 2013: 2013 International Conference on English Linguistics, Korea University and Korea Military Academy, Seoul, 2013 年 7 月 5 日.
159. Chie Nakamura, Manabu Arai and Yasunari Harada, "Syntactic priming of the initial analysis in L2 comprehension: Evidence from a self-paced reading study with Japanese EFL learners," 言語科学会第 15 回年次国際大会 (JLS2013), 活水女子大学, 2013 年 6 月 29 日.
160. 阪井和男, 「交流制約法と適応型イノベーションサイクル」, 明治大学サービス創新研究所 サービス創新 Lab.Vol.4「お客様の事、知ってますか？」ワークショップ, 明治大学文明とマネジメント研究所(明治大学), 2013 年 6 月 24 日.
161. 阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之, 「談話分析によるハイパフォーマンスチームのイノベーションプロセスのモデル化 ~ 会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析 ~」, 電子情報通信学会思考と言語研究会, 筑波大学(春日地区), 2013 年 6 月 14 日.
162. Takeo Tatsumi, Yoshiaki Nakano, Noriaki Kusumoto, Joji Maeno and Yasunari Harada, "To Bear the Unbearable: College-level Information Ethics Education Incorporating Discussions of Ethical Dilemmas," ETHICOMP 2013, University of Southern Denmark, Kolding, Denmark, 2013 年 6 月 13 日.
163. 阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之, 「ハイパフォーマンスチームのイノベーション・ダイアグラムによるプロセス解析」, 第 83 回次世代大学教育研究会, ディスコ西部支社会議室(福岡市), 2013 年 6 月 8 日.
164. 阪井和男, 「LMS 活用で加速するワークショップ形式のアジャイル授業」, 第 3 回 C-Learning セミナー, ベルサール飯田橋ファースト(東京・飯田橋), 2013 年 5 月 31 日.
165. 阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一・中川貴之, 「感情に焦点をあてたハイパフォーマンスチーム特性の交流分析による可視化 ~ ネクストワールド・サミットにおける会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析 ~」, 第 81 回次世代大学教育研究会, 明治大学文明とマネジメント研究所(東京), 2013 年 4 月 20 日.
166. 阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一・中川貴之, 「感情に焦点をあてたハイパフォーマンスチーム特性の交流分析による可視化 ~ 会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析 ~」, 2013 年度サービス学会第 1 回国内大会(同志社大学), 2013 年 4 月 10 日.
167. \*阪井和男・内藤隆, 「感情によるワークショップ効果測定法の提案 ~ 創造的なワークショップでは課題提起者の感情はどう変化するか ~」, 電子情報通信学会思考と言語研究会, 明治大学文明とマネジメント研究所, 2013 年 2 月 22 日.
168. \*阪井和男, 「次世代リベラルアーツとしての芸術思考 ~ 芸術思考が育む『生きる

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

- 力』～」, 第一部『『芸術思考キャリアフォーラム山形』構想を考える」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
169. \*戸田博人, 「企業が求める社会人基礎力と芸術思考」, 第一部『『芸術思考キャリアフォーラム山形』構想を考える」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
170. \*本間真, 「就活革命としてのポストンキャリアフォーラム ～世界最大の日英バイリンガル就職イベントの紹介～」, 第一部『『芸術思考キャリアフォーラム山形』構想を考える」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
171. \*有賀三夏(ファシリテーター)・阪井和男・奥田修史・戸田博人・本間真, パネルディスカッション『『芸術思考キャリアフォーラム山形』構想を考える」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
172. \*永谷研一, 「教育イノベーションの到達点としての芸術思考」, 第二部「芸術思考は社会の役に立つのか?」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
173. \*内藤隆, 「身体表現としてのスポーツから芸術思考を考える」, 第二部「芸術思考は社会の役に立つのか?」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
174. \*栗山健, 「日本の高等教育の最新動向 ～リベラルアーツ復興に向けた苦闘の現状～」, 第二部「芸術思考は社会の役に立つのか?」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
175. \*原田康也, 「芸術思考とメタファー: 詩と数学と科学と」, 第二部「芸術思考は社会の役に立つのか?」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
176. \*森憲一, 「芸術思考がビジネスに役に立つ理由」, 第二部「芸術思考は社会の役に立つのか?」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
177. \*庄司博幸, 「芸術思考は後で効いてくる ～創造性と意志の教育現場より～」, 第二部「芸術思考は社会の役に立つのか?」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学, 2013 年 2 月 1 日.
178. \*阪井和男・有賀三夏, 「生きる力を育む芸術思考 ー知的能力の統合的な育成を目指してー」, 情報コミュニケーション学会第 10 回研究会(優秀発表賞), 2012 年 10 月 6 日.
179. \*有賀三夏, 「アートの発信 ー創作活動から見える表現の可視化ー」, 情報コミュニケーション学会第 10 回研究会, 明治大学, 2012 年 10 月 6 日.
180. \*阪井和男・有賀三夏, 「知性と倫理 ～生きる力を育む芸術思考～」, 第 71 回次世代大学教育研究会, 岡山大学, 2012 年 7 月 28 日.
181. \*坪田康・壇辻正剛, 「Jigsaw reading activity を用いたスピーキング活動の試み」, 第 71 回次世代大学教育研究会, 岡山大学, 2012 年 7 月 28 日.
182. \*原田康也, 「技術(スキル)としての英文法(その 1)」, 第 71 回次世代大学教育研究会, 岡山大学, 2012 年 7 月 28 日.

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等  
<既に実施しているもの>

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

#### ・展示会

「創造性開発研究センター2014 活動報告展」, やまがた藝術学舎(東北芸術工科大学), 2015年3月21日~4月4日, 来場者数203名.

「創造性開発研究センター2015 活動報告展」, 東北芸術工科大学北側エントランス, 2016年3月25日~4月3日, 来場者数159名.

#### ・インターネットでの公開状況:

東北芸術工科大学創造性開発研究センター <http://sozo.tuad.ac.jp/>

Art in Life <http://artinlife.org/>

次世代大学教育研究会 <http://nextedu.chiegumi.jp/>

#### <これから実施する予定のもの>

#### ・今年度の公開シンポジウムの開催

2013年2月以来、毎年冬の開催が恒例化している次世代大学教育研究会や情報コミュニケーション学会と共催する形で創造性開発研究センター主催のシンポジウムを2017年にも1~3月に開催する。

さらに、11(4)「国際シンポジウム等の開催」において最終年度の企画を記したが、これに先駆けて今年度中にペンステート大学(ペンシルバニア州)のミンディ・コンハーバー氏を招聘することを検討している。氏はガードナー氏の右腕であり、ハーバード大学で行われている実践的な多重知能理論の研究プロジェクト「プロジェクト・ゼロ」の主任研究員でディレクター兼マネージャである。ミンディ氏の招聘によって、最終年度におけるガードナー氏の招聘への先鞭をつけることと、本プロジェクトとハーバード大学との交流・連携を図ることが目的である。これにともなう予算の増額を検討中である。

#### ・最終年度の公開シンポジウム、および国際シンポジウムの開催

多重知能理論の提唱者であるハワード・ガードナー氏(ハーバード大学)を招聘して、最終年度に本センター主催の国際シンポジウムを山形と東京で開催を計画する。

### 14 その他の研究成果等

「12 研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果及び企業との連携実績があれば具体的に記入してください。また、上記11(4)に記載した研究成果に対応するものには\*を付してください。

※ 論文や学会発表等になじまない研究である場合は、本欄を充実させること

#### <社会人講座の開講>

2014年7月22日から2015年3月28日まで、東京藝術学舎(外苑キャンパス)において、計10回にわたって芸術思考をテーマとする社会人講座「2014年度 創造の時空学 ~芸術思考のインパクト~『芸術』に秘められたパワーの核心をさぐる連続講座」<前期(5回)><後期(5回)>を開催した。

#### <山形県高等学校教諭との連携研究会>

教員向け研究会と高校生対象WSの実施を通して、デザイン思考教育に関心をもつ教員のネットワークづくりを進めるために、「探究型学習・デザイン思考に関わる研究会」を設置し、2015年8月5日、10月17日、2016年2月14日の3回にわたって実施した。参加教員は延べ37名で、内訳は普通科、工業科、農業科、商業科の高校教諭、県庁高校教育課職員である。テーマを「デザイン思考を教育に活かす」とし、デザイン思考WS体験とともに、WSを振り返って「探究型学習へのデザイン思考の適用」について検討してきた。

今後の計画は、教員向け研究会および高校生向けWSを継続的に開催予定である。今後、本研究会は初等中等教育において創造性と問題解決力の育成に関わる教科横断的な試行の機会を拡げていくために、探究型学習へのデザイン思考教育の適用をテーマとして、山形県内各教育機関の垣根を越えた運動体を目指している。

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

### <企業との連携による研究協力>

多重知能理論ベースのアンケートを実装していた株式会社プライム・ラボ(代表取締役・大島伸矢)と株式会社アルム(代表取締役・坂野哲平)と連携し、本研究のために多重知能分析アンケート票の無償提供を受け、さらにアンケートの妥当性の詳細な検証資料も提供いただき研究発表を共同で行なっている。両社はすでに多重知能理論にもとづく日本語による自動アンケート集計システムを実装し、全国規模の塾「TOMAS」に通う小学生高学年を対象に株式会社アルム(代表取締役・坂野哲平)でサービス提供しており、スポーツパフォーマンス測定会における小中学生を対象としたサービス提供も株式会社プライム・ラボ(代表取締役・大島伸矢)によってなされていた。

同社からは明治大学サービス創新研究所を通じてデータの提供を受けることができたため、同社が作成した多重知能アンケートのテスト理論的な根拠が明らかにされ、学会発表論文として公開できた(論文\*2、学会発表\*75, 78, 79)。

### <在学生・院生への研究インパクト>

東北芸術工科大学の学生が研究会・学会で論文を書き研究発表を行うという自律的な研究が進展した。2014年11月以降現在まで、情報コミュニケーション学会において学部学生による発表7件(論文\*188-186, 184-186、学会発表\*192, 193, 195-197)、院生による発表2件(論文\*187, 187、学会発表\*194, 198)がなされた。本プロジェクト採択前から頻繁にび次世代大学教育研究会や情報コミュニケーション学会を東北芸術工科大学において開催したが、学生への研究インパクトとして有効であったことが判明した。

### <学生による研究発表(論文)>

183. \*鈴木竜平, 『『発想・構想の能力』を伸ばす授業の研究』, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会発表論文集, pp. 16-20, 2015年2月28日。(査読無)
184. \*樋口早紀, 「社会で生きる芸術思考」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会発表論文集, pp. 48-51, 2015年2月28日。(査読無)
185. \*上遠野里香, 「芸術思考による可視化の実践 計画遂行編 ~Boston Children's Museumでの活動を事例として~」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会発表論文集, pp. 52-55, 2015年2月28日。(査読無)
186. \*添野美生, 「芸術思考のもたらす、行動の可能性」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会発表論文集, pp. 56-59, 2015年2月28日。(査読無)
187. \*甲斐未樹, 「生徒の関心・意欲を引き出す美術の授業の研究」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会発表論文集, pp. 70-75, 2015年2月28日。(査読無)
188. \*斉藤康雄・布川光郷, 「芸術思考を利用したキャリア講座と講座から派生した学生の課外活動についての一考察」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会発表論文集, pp. 106-109, 2015年2月28日。(査読無)
189. \*川元里紗, 「芸術思考と自己の成長」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会発表論文集, pp. 110-111, 2015年2月28日。(査読無)
190. \*斉藤康雄・長谷川裕・布川光郷, 「アドバンスト山形講座の現状と今後についての考察」, 情報コミュニケーション学会第15回研究会発表論文集, pp. 21-26, 2014年11月8日。(査読無)
191. \*上遠野里香, 「芸術思考による可視化の実践」, 情報コミュニケーション学会第15回研究会発表論文集, pp. 27-32, 2014年11月8日。(査読無)

### <学生による研究発表(学会発表)>

192. \*斉藤康雄・布川光郷, 「芸術思考を利用したキャリア講座と講座から派生した学生の課外活動についての一考察」, 情報コミュニケーション学会第12回全国大会, 東北芸術工科大学, 2015年3月1日。



法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

193. \*川元里紗,「芸術思考と自己の成長」,情報コミュニケーション学会第12回全国大会,東北芸術工科大学,2015年3月1日.
194. \*鈴木竜平,『発想・構想の能力』を伸ばす授業の研究」,情報コミュニケーション学会第12回全国大会,東北芸術工科大学,2015年2月28日.
195. \*樋口早紀,「社会で生きる芸術思考」,情報コミュニケーション学会第12回全国大会,東北芸術工科大学,2015年2月28日.
196. \*上遠野里香,「芸術思考による可視化の実践 計画遂行編 ～Boston Children's Museumでの活動を事例として～」,情報コミュニケーション学会第12回全国大会,東北芸術工科大学,2015年2月28日.
197. \*添野美生,「芸術思考のもたらす、行動の可能性」,情報コミュニケーション学会第12回全国大会,東北芸術工科大学,2015年2月28日.
198. \*甲斐未樹,「生徒の関心・意欲を引き出す美術の授業の研究」,情報コミュニケーション学会第12回全国大会,東北芸術工科大学,2015年2月28日.
199. \*斉藤康雄・長谷川裕・布川光郷,「アドバンスト山形講座の現状と今後についての考察」,セッション2「芸術思考2」,情報コミュニケーション学会第15回研究会,東北芸術工科大学,2014年11月8日.
200. \*上遠野里香,「芸術思考による可視化の実践」,セッション2「芸術思考2」,情報コミュニケーション学会第15回研究会,東北芸術工科大学,2014年11月8日.
201. \*東北芸術工科大学チュートリアル学生有志"Team Art in Life",「Let's Try ～私たちにとっての芸術思考～」,第91回次世代大学教育研究会,2014年2月1日.

#### <受賞>

202. 渡部泰山,平成27年度山形大学ベストティーチャー賞,山形大学,2016年3月.
203. \*秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男,情報コミュニケーション学会第12回全国大会研究奨励賞「新規事業を生み出す芸術思考」,2015年2月28日.
204. \*村山真理・有賀三夏・池田知之,情報コミュニケーション学会第12回全国大会研究奨励賞「芸術思考を育む『場』の構築ー大学間連携による授業実践の報告」,2015年2月28日.
205. Nakamura, Chie, Arai, Manabu, Harada, Yasunari & Hirose, Yuki, "L2 learners' use of verb subcategorization information in processing filler-gap dependencies," 第14回日本第二言語習得学会年次大会(J-SLA2014),関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス,2014年5月31日.【2014年度J-SLA優秀口頭発表賞】
206. 戸田博人・香山裕子・西村りさ・三橋朋子・小田有希子・是永綾子,日本 e-Learning学会,2013年度(10周年記念)学術講演会優秀賞,日本 e-Learning学会,セッションII-1,「学習履歴分析による e-Learning コースタイプ別学習者特性調査」,2013年11月22日.
207. \*阪井和男・有賀三夏,「生きる力を育む芸術思考ー知的能力の統合的な育成を目指してー」,情報コミュニケーション学会第10回研究会(優秀発表賞),2012年10月6日.

#### <作品展>

208. 青山ひろゆき,館蔵展(喜多方市立美術館/福島),2016.(グループ展)
209. 有賀三夏,ボストンチルドレンズミュージアム,Boston USA,グループ作品展示・企画「Art & Friendship from Tohoku Japan/Trees Make Happiness」,2016年3月8日～10月31日(予定).
210. 青山ひろゆき,「青山ひろゆき展」,靖山画廊,2016年02月12日～2月27日
211. 吉賀伸,「第6回次代を担う彫刻家たち展」,長泉院附属現代彫刻美術館,東京都目黒区,2015年10月24日～12月20日.(グループ展)
212. 青山ひろゆき,「青山ひろゆき展ー地境ー」,最上徳内記念館,2015年10月16日

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

～11月17日

213. 有賀三夏, Out of the Blue, 「Darumas World」作品展示(アメリカ・ボストン), 2015年9月10日～2016年3月30日.
214. 吉賀伸, 「緑の中の小さな彫刻展 vol.4」, ギャラリー華, 東京都港区, 2015年9月5日～9月29日. (グループ展)
215. 有賀三夏, 作品展示「3匹のだるまたち」, ホスピタルアートに関する展示, 日本海総合病院(山形県酒田市), 2015年8月29日～現在.  
<http://www.nihonkai-hos.jp/hospital/>
216. 青山ひろゆき, 「青山ひろゆき展 ーまたたきー」, アートスペース泉, 2015年7月25日～8月9日
217. 青山ひろゆき, 「青山ひろゆき展 ー耀ー」, 喜多方市立美術館, 2015年4月25日～5月24日
218. 青山ひろゆき, 「たいせつなもの展 水」, 靖山画廊(東京), あいづまちなかアートプロジェクト2015(會津稽古堂/福島), 2015. (グループ展)
219. 有賀三夏, ボストンチルドレンズミュージアム, グループ作品展示・企画「Art & Friendship from Tohoku Japan/ Bottom Monster's Friends」, 2015年3月12日～7月31日(予定).
220. 澤口俊輔, The Westin Art Showcase Exhibition vol.9 澤口俊輔「Essay」, ウェスティンホテル仙台(宮城県仙台市), 2015年1月17日～2015年2月26日.
221. 深井聡一郎, 「ヤマノカチノモノガタリ[地域文化遺産の保存と伝承]」, 山形県郷土館文翔館, 2014年12月13日～23日.
222. 渡部泰山, 舞台公演(脚本・舞台監督)「東北幻野版・四谷怪談」, 新庄市民文化会館, 2014年11月9日～10日.
223. 渡部泰山, 東北幻野第32回演劇公演「東北幻野版 銀河鉄道の夜」制作, 新庄市民文化会館, 2014年9月27日～28日.
224. 渡部泰山, 美術展「村上滋郎展」企画運営, アトリエ・山形現代美術館, 2014年9月26日～10月26日.
225. 澤口俊輔, 「震災と表現:共有するためのメタファー」, 気仙沼リアス・アーク美術館(宮城県気仙沼市), 2014年9月17日～11月3日. (グループ展)
226. 吉賀伸, 「緑の中の小さな彫刻展 vol.3」, ギャラリー華, 東京都港区, 2014年9月6日～9月27日. (グループ展)
227. 青山ひろゆき, 「青山ひろゆき展」, YOKOI FINE ART, 2014年8月22日～9月6日
228. 吉賀伸, 個展「UNFORMED SENSES」, 日本橋高島屋美術画廊 X, 東京都中央区, 2014年8月6日～8月18日.
229. 青山ひろゆき, 「青山ひろゆき展」, GALLERY IDF, 2014年7月26日～8月10日
230. 吉賀伸, 「AGAIN-ST 4th EXHIBITION SCULPTURE IS (NOT) ORNAMENTS . 置物は彫刻か?」, 東北芸術工科大学, 2014年6月10日～20日. (グループ展)
231. 深井聡一郎, 「AGAIN-ST 4th EXHIBITION SCULPTURE IS (NOT) ORNAMENTS . 置物は彫刻か?」, 東北芸術工科大学, 2014年6月10日～20日. (グループ展)
232. 有賀三夏, 山形市蔵王倫理法人会10周年記念「こまりん」マスコットキャラクター, ロゴマーク制作, 山形市蔵王倫理法人会, 2014年6月.
233. 青山ひろゆき, 「玄玄展」(LATOV/福島), 「ART NAGOYA 2014」((ウェスティンナゴヤキャッスル 9F フロア/名古屋), 第29回国民文化祭あきた2014招待出品(秋田県立美術館/秋田), 2014. (グループ展)

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

234. 渡部泰山, 舞台公演・演出/かむてん子ども劇場総括指導「かむてんとよだかの星」, 新庄市民プラザ大ホール, 2014年1月12日.
235. 深井聡一郎, 「TUAD mixing! 2013 秘境、その芸術表現」, 東北芸術工科大学, 2013年11月20日～29日.
236. 深井聡一郎, 「素材の展望 2013」, 東北芸術工科大学, 2013年11月9日～16日.
237. 深井聡一郎, 「『モノ』再考」, 武蔵野美術大学, 2013年10月10日～10月19日.
238. 澤口俊輔, 「宮城県芸術祭 第50回記念企画展」, せんだいメディアテーク, 宮城県仙台市, 2013年10月4日～9日. (グループ展)
239. 深井聡一郎, 「AGAIN-ST 3rd EXHIBITION DEPENDENT SCULPTURE —彫刻を支える物は何か—」, 東京藝術大学, 2013年9月25日～10月5日.
240. 澤口俊輔, 「宮城県芸術祭 第50回記念企画展」, せんだいメディアテーク(宮城県仙台市), 2013年10月4日～9日. (グループ展)
241. 深井聡一郎, 「AGAIN-ST 3rd EXHIBITION DEPENDENT SCULPTURE —彫刻を支える物は何か—」, 東京藝術大学, 2013年9月25日～10月5日.
242. 古賀伸, 東北芸術工科大学教員作品展「ギフト・オブ・ネイチャー」, やまがた藝術学舎展覧会シリーズ no. 1, やまがた藝術学舎, 2013年8月6日～9月18日.
243. 青山ひろゆき, 「青山ひろゆき —虹色スイッチー」アートスペース泉, 2013年7月13日～23日
244. 青山ひろゆき, 「気韻」(ARTISLONG GALLERY+KUNSAZT/京都), 「てとてと展」(アルテピアッツァ美唄/北海道), 2013. (グループ展)
245. 有賀三夏, Boston USA, Out of the Blue Art Gallery, 作品展示, 常設展示継続, 2013～2016.
- <メディア(記事・放送等)>
246. 官宏, 「ICT 駆使、課題解決力磨く ～6年間、どんな新しい教育を?～」, 朝日新聞, 2016年5月7日.
247. 東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 「自ら解決する力育む 東北芸工大探究型学習研究会」, 毎日新聞, 2016年3月4日.
248. 有賀三夏・永谷研一, 「Art in Life 人生に芸術をどう使おうか? (芸術思考 創造的な暮らしを!)」, USTREAM 番組「発明家 永谷の『教育イノベーション』」, 第33回放送, 2015年12月14日.
249. 東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 「県教委 芸工大と連携協定 課題探究型学習を推進」, 読売新聞, 2015年11月27日.
250. 東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 「東桜学館の授業開発 県教委 芸工大と連携協定」, 山形新聞, 2015年11月27日.
251. 東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 「東桜学館の授業開発 県教委 芸工大と連携協定」, 山形新聞, 2015年11月27日.
252. 秋山ゆかり, 「芸術思考と新規事業(下) ビジョンの具現化で成否」, 日刊工業新聞, p. 4, 2015年8月31日.
253. 秋山ゆかり, 「芸術思考と新規事業(上) 共通する創造のプロセス」, 日刊工業新聞, p. 4, 2015年7月27日.
254. 有賀三夏, 「アートセラピーが脳に効く」, BSフジ「革新のイズム ～イノベータの暴論～」, 放送 21:55, 2015年5月2日. <http://www.audi.jp/innovator/>
255. 東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 「新聞紙使いワークショップ 芸工大できた!カラフル衣装」, 山形新聞, 2015年3月26日.
256. 有賀三夏, おはよう日本, NHK 総合(東北6県域), 放送 7:50, 2015年2月13日.

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

257. 有賀三夏, やまがた6時, NHK 総合(山形県域), 放送 18:15, 2015年2月12日.
258. 東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 「子どもの生きる力育む芸術思考 可能性シンポで考える」, 山形新聞, 2013年12月26日.
259. 東北芸術工科大学創造性開発研究センター, 「芸術で『生きる力』育む」, 山形新聞, 2013年10月5日.
260. 有賀三夏・永谷研一, 「人生に芸術をどう使おうか? (芸術思考とアートセラピー)」, USTREAM 番組「発明家 永谷の『教育イノベーション』」, 第8回放送, 2012年12月14日.
- <講演>
261. 有賀三夏, 「人生に芸術をどう使おうか? 芸術思考」, 秋田県立西目高校, 2016年2月26日.
262. 有賀三夏, 「人生に芸術をどう使おうか?」, 山形県高等学校教育研究会 芸術部会、鶴岡中央高等学校, 2015年7月7日.
263. 有賀三夏, 「モチ塾第8回『ドキドキトキメク心理学』」, 山形市教育委員会 社会教育青少年課, 2015年9月30日.
264. 有賀三夏, 「アートの力:アートセラピーを求めて I」, 人間発達科学部インストラクショナル・デザイン講義, 富山大学, 2015年5月15日、6月12日.
265. 有賀三夏・舘鼻則孝, 「アーティスト舘鼻則孝氏に見る[芸術思考]」, 芸術思考のインパクト 有賀×舘鼻イベント 対談公開講座, 東京藝術学舎, 2015年1月17日.
266. 有賀三夏, 「芸術思考、多重知能による『Art in Life -人生に芸術をどう使おうか?』」, 専門学校ヒコ・みずのジュエリーカレッジ, 2015年1月27日.
267. 有賀三夏, 「芸術思考、多重知能による「Art in Life -人生に芸術をどう使おうか?」」, 静岡県立沼津西高等学校, 2014年12月26日.
268. 有賀三夏, 特別授業・ワークショップ「あーとのちから:ダンドットで遊ぼう!」, 大阪市立南住吉大空小学校, 2014年12月15-16日.
269. Jonathan D. Messinger・有賀三夏, サービス創新研究所 勉強会「Good work project and Art thinking」, 明治大学サービス創新研究所, 2014年11月29日.
270. 有賀三夏, アートセラピー×アロマセラピー 講義とワークショップ:「アートセラピーを体験しよう」, 富山 生と死を考える会, 高岡市ふれあい福祉センター, 2014年10月25日.
271. 有賀三夏, 特別授業・ワークショップ「あーとのちから: スリーピーベアと友達になろう!」, 大阪市立南住吉大空小学校, 2014年10月20-21日.
272. 有賀三夏, スーパーサイエンスハイスクール講演会「芸術思考、多重知能による Art in Life -人生に芸術をどう使おうか?」, 千葉県立船橋高等学校, 2014年9月29日.
273. 有賀三夏, 「Art in Life -人生に芸術をどう使おうか?」, さぬき生活文化振興財団, 2014年9月13日.
274. 有賀三夏, 「育成する資質や能力から考える教育の授業-中学校美術科・高等学校芸術科(美術)-」, 「美術の力 -芸術思考論を基に-」, 秋田県総合教育センター, 2014年9月3日.
275. 有賀三夏, 「Artの力 ~Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?~」, 米沢市山形倫理協会, 2014年8月28日.
276. 有賀三夏, 中学校美術Q&A in 宮城「Art in Life -人生に芸術をどう使おうか?」, 宮城県仙台二華中学校・宮城県仙台二華高等学校, 2014年6月21-22日.
277. 有賀三夏, 「ヒーリングアートワークショップ・講義『メッセージコサージュ』」, 富山・生

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

- と死を考える会 全国協議会 2013 年全国大会, 富山県高岡市立博物館, 2014 年 6 月 15 日.
278. 有賀三夏・上村博, 「イメージを具現化する芸術思考のパワーとは?」, 芸術思考のインパクト 有賀×上村イベント 対談公開講座, 東京藝術学舎, 2014 年 6 月 14 日.
279. 有賀三夏, 「アート之力:アートセラピーを求めて II」, 人間発達科学部インストラクショナル・デザイン講義, 富山大学, 2014 年 6 月 13 日.
280. 有賀三夏, 「芸術思考と創造力 ~Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?」, 全国高等学校美術工芸教育研究会, 千葉女子高校, 2014 年 5 月 22 日.
281. 有賀三夏, 「アート之力:アートセラピーを求めて I」, 人間発達科学部インストラクショナル・デザイン講義, 富山大学, 2014 年 5 月 16 日.
282. 有賀三夏, 「芸術思考と創造力 ~Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?」, ふくい美術eフォーラム2014 ヤング・アート・キャンプ美術, 福井県立図書館, 2014 年 5 月 10 日.
283. 有賀三夏, 「Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?」, 中学校美術教育 Q&A in 三重, 三重県人権センター, 2013 年 12 月 23 日.
284. 有賀三夏, 「Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?」, 土曜ゼミナール, 宮城県宮城野高校, 2013 年 12 月 7 日.
285. 有賀三夏, 「Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?」, 第46回秋田県高等学校総合美術展講演会, 秋田アトリオン, 2013 年 11 月 31 日.
286. 有賀三夏, 「ヒーリングアートワークショップ・講義『メッセージコサージュ』」, 富山・生と死を考える会, 高岡市ふれあい福祉センター, 2013 年 11 月 30 日.
287. 有賀三夏, 「Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?」, 中学校美術教育 Q&A in 秋田, 秋田大学, 2013 年 11 月 17 日.
288. 有賀三夏, 「Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?」, GKB 学校広報ソーシャルメディア活用勉強会 第二回教育カンファレンス, 東京 ユビキタス協創広場 CANVAS | 内田洋行, 2013 年 9 月 10 日.
289. 有賀三夏, 「アートのちから ~Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?~」, 山形県倫理法人会, 山形グランドホテル, 2013 年 7 月 20 日.
290. 阪井和男, 巻頭言「ワークショップの教育方法論としての可能性」, 情報コミュニケーション学会, 『情報コミュニケーション学会誌』, Vol. 9, No. 1, pp. 2-3, 2013 年 7 月 15 日.
291. 有賀三夏, 「アートのちから ~Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?後編~」, 富山大学 人間発達科学部, 2013 年 6 月 14 日.
292. 有賀三夏, 「アートのちから ~Art in Life 人生に芸術をどう使おうか?前編~」, 富山大学 人間発達科学部, 2013 年 5 月 17 日.
293. 阪井和男, 「ワークショップの未来」, 明治大学サービス創新研究会「ワークショップを活用した“創造的学び”の促進 ~学校, 企業, NPO で広がるワークショップ~」, 明治大学サービス創新研究所, 2013 年 3 月 9 日.
294. 阪井和男, 「生きる力を次世代リベラルアーツにするには ~ワークショップと ICT が拓く可能性~」, 第 10 回 情報コミュニケーション学会全国大会「能動的学習とコミュニケーション」, 武庫川女子大学中央キャンパス(兵庫県西宮市), 2013 年 2 月 24 日.
295. 有賀三夏(ファシリテーター)・阪井和男・奥田修史・戸田博人・本間真, パネル討論「『芸術思考キャリアフォーラム山形』構想を考える」, 第 79 回次世代大学教育研究会「芸術思考シンポジウム in 山形」, 東北芸術工科大学(山形市), 2013 年 2 月 1 日.
- <センター勉強会>
296. \*阪井和男・戸田博人, 「アンケート分析結果報告会」, こども芸術大学 2 階会議室,

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

2016年3月23日.

297. 「2016春のワークショップ振り返り」, ことども芸術大学2階会議室, 2016年3月23日.  
 298. 「2016新春のワークショップ振り返り」, やまがた藝術学舎, 2016年1月23日.  
 299. \*阪井和男・戸田博人, 「アンケート分析結果報告会」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2015年12月16日.  
 300. 「2015冬のワークショップ振り返り」, やまがた藝術学舎, 2015年11月28日.  
 301. 「2015秋のワークショップ振り返り」, やまがた藝術学舎, 2015年9月19日.  
 302. 原田康也, 「芸術思考の考察についてのレクチャー」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2015年5月29日.  
 303. 「レッジョ・エミリア研修報告会」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2015年5月29日.  
 304. 戸田博人, 「インストラクショナル・デザイン勉強会」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2014年9月22日.  
 305. 戸田博人, 「夏のワークショップ祭 検証報告会」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2014年9月22日.  
 306. 阪井和男・戸田博人・森憲一・大島伸矢, 「夏のワークショップ祭 学内外合同振り返り」, ことども芸術大学2階会議室, 2014年8月17日.  
 307. 片桐隆嗣・遠藤節子・青山ひろゆき, 「夏のワークショップ祭 計画発表会」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2014年6月3日.  
 308. 片桐隆嗣・遠藤節子・青山ひろゆき, 「レッジョ・エミリア研修報告会」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2014年6月3日.  
 309. 矢作鹿乃子, 「わくわくワークショップ振り返り」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2014年3月24日.  
 310. 有賀三夏, 「多重知能(MI)理論の基礎を学ぶ」, 東北芸術工科大学本館6階第一会議室, 2014年1月25日.

## 15 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

### <「選定時」に付された留意事項>

多重知能理論の妥当性の検証にも踏み込んだ研究の広がり求められる。

### <「選定時」に付された留意事項への対応>

多重知能理論の妥当性については、本研究で用いた多重知能分析アンケート票の妥当性を検証した(小学4~6年生2,691人)ことと、これに加えて主要5因子性格検査アンケートおよびSAN感情測定スケールを用いたアンケートを2014年10月のWSから実施しており、これまで実施したうち16WSを対象として前記3種のアンケート間の包括的な関連性を評価中である。これらの解析によって、これまで半経験的に用いられてきた多重知能の定性的評価に対して、統計学的な根拠にもとづいた分析・評価できるようになったことが挙げられる。

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

## 16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他(参加費)	
平成25年度	施設	59,939	29,970	29,969				
	装置	11,050	5,525	5,525				
	設備	0						
	研究費	5,116	2,535	2,535				46
平成26年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	11,324	5,662	5,662				
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	6,557	3,279	3,278				
総額	施設	59,939	29,970	29,969	0	0	0	0
	装置	11,050	5,525	5,525	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	22,997	11,476	11,475	0	0	0	46
総計	93,986	46,971	46,969	0	0	0	46	

※ 3年目(または2年目)は予定額。

## 17 施設・装置・設備の整備状況 (私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)

(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
やまがた藝術学舎	H25年度	630㎡	6	3200	63,000	29,969	私学助成

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m<sup>2</sup>

(様式1)

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
				h			
				h			
				h			
(研究設備)				h			
ICT活用ワークショップ設備	H25年度		1式	552	11,050	5,525	私学助成
				h			
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			
				h			

## 18 研究費の支出状況

(千円)

年度	平成 25 年度		
小科目	支出額	積算内訳	
		主な用途	金額
教育研究経費支出			
消耗品費	469	シンポジウム実施・ワークショップ実施	469
光熱水費	0		0
通信運搬費	90	シンポジウム実施・ワークショップ実施	90
印刷製本費	331	シンポジウム実施・ワークショップ実施	331
旅費交通費	1,625	シンポジウム実施・ワークショップ実施	1,625
報酬・委託料	400	シンポジウム実施・ワークショップ実施	400
出版物費	131	研究調査	131
賃借料	14	シンポジウム実施・研究会実施	14
損害保険料	5	ワークショップ実施	5
諸会費	1	学会参加	1
会議費	330	シンポジウム実施・研究会実施	330
計	3,396		3,396
アルバイト関係支出			
人件費支出 (兼務職員)			
教育研究経費支出	132	展示補助アルバイト	132
計	132		132
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	1,634	プロジェクター・スクリーン テーブル・スツール	459 1,175
図書			
計	1,634		1,634
研究スタッフ関係支出			
リサーチ・アシスタント			
ポスト・ドクター			
研究支援推進経費			
計	0		



法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

年 度	平成 26 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	285	ワークショップ実施	285	ワークショップ用品、研究記録用品
光 熱 水 費				
通 信 運 搬 費	67	ワークショップ実施	67	ワークショップ案内送料、ワークショップ用品送料
印 刷 製 本 費	1,204	ワークショップ実施、報告書作成	1,204	チラシ・ポスター印刷代、報告書印刷代
旅 費 交 通 費	4,170	研究調査、ワークショップ実施、その他	4,170	海外研究調査旅費、ワークショップ実施旅費
報 酬 ・ 委 託 料	2,934	ワークショップ実施、報告書作成	2,934	ワークショップ委託料、報告書原稿料
賃 借 料	14	研究調査	14	ルーターレンタル料
出 版 物 費	51	研究調査	51	調査資料書籍代
損 害 保 険 料	51	研究調査、ワークショップ実施	51	海外旅行保険料、レクリエーション保険料
諸 会 費	561	ワークショップ・シンポジウム参加、その他	561	ワークショップ・シンポジウム参加料
会 議 費	150	ワークショップ実施、研究会実施	150	打合せ弁当代、こども用飲料代
計	9,487		9,487	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人 件 費 支 出 (兼務職員)				
教 育 研 究 経 費 支 出 計	0			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教 育 研 究 用 機 器 備 品	1,837	パソコン	325	パソコン1台
		プロジェクター	1,512	プロジェクター1台
図 書				
計	1,837		1,837	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント				
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	0			

法人番号	061001
プロジェクト番号	S1311001

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	315	ワークショップ実施、資料整理	315
光 熱 水 費	0		
通 信 運 搬 費	63	ワークショップ案内、アンケート送付	63
印 刷 製 本 費	1,156	報告書作成、ワークショップ	1,156
旅 費 交 通 費	1,703	研究調査、ワークショップ実施	1,703
報 酬 ・ 委 託 料	2,541	アンケートデータ分析	2,541
出 版 物 費	259	調査研究、報告書作成	259
諸 会 費	196	講座・研究会参加	196
会 議 費	79	ワークショップ実施	79
損 害 保 険 料	5	ワークショップ実施	5
計	6,317		6,317
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出 (兼務職員)	0		0
教育研究経費支出	240	研究補助アルバイト	155
		ワークショップ実施補助アルバイト	85
計	240		240
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品			
図 書			
計	0		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント			
ポスト・ドクター			
研究支援推進経費			
計	0		

# ＜別添資料 1＞

## 実施済みのワークショップ一覧

まとめ

ワークショップ数 44  
 のべ参加者数 618 人  
 実施期間 2013 年 9 月 23 日～2016 年 3 月 23 日

表. 実施済みのワークショップ一覧

イベント名	記号	ワークショップ名	担当	年月日	対象	参加者数
だがしや楽校 ～秋のおわりを楽しもう～	A	もじゃマンの好きなものなあ～に？	片桐隆嗣	2013 年 9 月 23 日	小 1～6	15
	B	誰でも芸術家				
	C	おっ木い秋の木！				
こども芸術大学ワークショップ	—	ペタペタからうまれるものがたり	矢作鹿乃子	2014 年 3 月 24 日	小 1～3	15
2014 夏のワークショップ祭	A	色水鉄砲でTシャツをつくろう！	青山ひろゆき	2014 年 8 月 11 日	小 1～4	15
	B	かくれた顔を探せ！	渡部桂	2014 年 8 月 11 日	小 4～6	8
	C	見えない地図を描く	渡部桂	2014 年 8 月 11 日	小 4～6	10
	D	世界一遅いたまころがしに挑戦しよう	柚木泰彦	2014 年 8 月 11 日	小 3～6	9
	E	わりえカルタをつくってあそぼう！	三橋幸次	2014 年 8 月 11 日	小 3～6	8
	F	食べる彫刻 自分らくがん	深井総一郎・古賀伸	2014 年 8 月 11 日	小 4～6	13
	G	TUAD スポーツパフォーマンス測定会	大島伸也	2014 年 8 月 17 日	小 5～6	15
	H1	体を動かして、スポーツタオルのデザインにチャレンジ！	澤口俊輔	2014 年 8 月 17 日	小 5～6	5
	H2	同上	澤口俊輔	2014 年 8 月 18 日	小 5～6	5
2014 大空小学校 (大阪)10 月	空	Sleepy Bear WS「ダルマたちとお友達になってね！」(2 日間)	有賀三夏	2014 年 10 月 20 日	小 4	20
	星	同上	有賀三夏	2014 年 10 月 20 日	小 4	20
	風	同上	有賀三夏	2014 年 10 月 20 日	小 5	20
	緑	同上	有賀三夏	2014 年 10 月 20 日	小 5	20
冬のワークショップ	A	花ぼうしづくり ～ぼうしに花を生けよう！～	青山ひろゆき	2014 年 12 月 14 日	小 1～3	15
	B	世界一遅い球転がしに挑戦しよう！ Ver.2	柚木泰彦	2014 年 12 月 14 日	小 3～6	9
	C	わくわく粘土ワークショップ Vo.1 ～カラフル陶芸でマイホームをつくろう！～	吉賀伸・深井聡一	2015 年 1 月 11 日	小 3～6	15
	D	雪を使って、世界に一つだけのアーチをつくろう！	渡部桂	2015 年 2 月 8 日	小 3～6	12

	E	へんてコラージュ ～見たことのない生き物をつくろう～	矢作鹿乃子	2015年2月8日	小1～3	14
2014 大空小学校 (大阪)12月	空	Dan dots WS「ダンドット」(2日間)	有賀三夏	2014年12月15日	小4	20
	星	同上	有賀三夏	2014年12月15日	小4	20
	風	同上	有賀三夏	2014年12月15日	小5	20
	緑	同上	有賀三夏	2014年12月15日	小5	20
2015 春のワーク ショップ	A	世界一遅い球転がしに挑戦しよう! Ver.3	柚木泰彦	2015年3月25日	小3～6	18
	B	ちぎってあそぼう! しんぶんし!	澤口俊輔	2015年3月25日	小1～3	18
	C	食べる彫刻 家族パン	深井聡一郎 青山ひろゆき 吉賀伸	2015年3月25日	小1～6	19
2015 中学生ワーク ショップ	A	Smart Stand up doll Making!! 「スマートスタンドアップドールを作ろう!」	有賀三夏	2015年6月20日	中学生	19
	B	同上	有賀三夏	2015年6月20日	中学生	20
	C	「デザイナーの視点(複眼思考)を体験しよう」	三橋幸次	2015年6月20日	中学生	20
	D	同上	三橋幸次	2015年6月20日	中学生	20
2015 秋のワーク ショップ	A	たたいて! つぶして! 大きな絵	青山ひろゆき・ 矢作鹿乃子	2015年9月19日	小1～6	25
	B	世界でひとつの「バッグ」をデザインしよう!	早野由美恵・渡部桂	2015年9月19日	小4～6	8
	C	身近な葉っぱをたたいて染めよう!	柳田哲雄・矢作鹿乃子	2015年9月19日	小4～6	11
鈴川小学校美術 クラブワークショップ	—	へんてコラージュ	矢作鹿乃子・青山ひろゆき	2015年11月10日	小4～6	24
2015 冬のワーク ショップ	A	さわって・たたいて・絵を描こう	矢作鹿乃子・青山ひろゆき	2015年11月27日	小1～6	15
	B	食べる彫刻 動物ビスケット	深井聡一郎・矢作鹿乃子	2015年11月27日	小4～6	12
2016 新春のワーク ショップ	—	わくわく粘土ワークショップ Vol.2 聴いて、触って、何つくる?	吉賀伸・矢作鹿乃子	2016年1月23日	小1～3	15
卒業/修了研究・ 制作展小学生向け鑑賞ツアー	—	—	全教員	2016年2月11日	小学生	9
2016 春のワーク ショップ	A	ハトメで繋げるオリジナル自分定規!	澤口俊輔	2016年3月23日	小3～5	6
	B	わくわく粘土ワークショップ Vol.3 (聴いて、触って、何つくる?)	矢作鹿乃子・吉賀伸	2016年3月23日	小3～5	7
	C	新・世界一遅い球転がしに挑戦しよう!	柚木泰彦	2016年3月23日	小3～6	9

以上

## ＜別添資料 2＞

### シンポジウム・研究会一覧

#### 【シンポジウム】

- 1) シンポジウム「小中高生の生きる力を育む芸術思考の可能性～東北で挑戦する、創造性開発～」

日時：2013年12月15日（日）13:00～17:00

会場：東北芸術工科大学本館 407 講義室

参加者数：106名

内容：講演「感性を触発する 4 体験」長南博昭（山形県教育委員会委員長、日本感性学会副会長）

特別招待講演「芸術思考は人を救う。組織を救う」奥田修史（創成館高等学校理事・校長）

対談「未来に求められる芸術思考」奥田修史×阪井和男（明治大学法学部教授）

#### 【研究会】

- 1) 「学内外共同研究員対象キックオフ研究会」

日時：2013年10月4日（金）

会場：やまがた芸術学舎

参加：栗山健（学研教育総合研究所）、阪井和男、戸田博人（（株）富士通ラーニングメディア）、本間真（（株）ディスコ事業開発部）、内藤隆（（株）シーエスアップ）、寺尾敦（青山学院大学）、中込敏寛（（株）日本スウェーデン福祉研究所）、森憲一（（株）サードステージカンパニー）、庄司博幸（（株）サードステージエデュケーション）、永谷研一（（株）ネットマン）、坪田康（京都大学）、山本康治（東海大学）、原田康也（早稲田大学）、長南博昭、渡部泰山（山形大学大学院）、渡邊斉（山形市立滝山小学校）、張崎正裕（山形市立南小学校）、遠藤正俊（山形市立第六小学校）、須田一成（長井市立長井南中学校）

片桐隆嗣、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、古藤浩、齋藤祥子、澤口俊輔、深井聡一郎、三橋幸次、柚木泰彦、吉賀伸、渡部桂

- 2) シンポジウム「小中高生の生きる力を育む 芸術思考の可能性 ～東北で挑戦する、創造性開発」振り返り研究会

日時：2013年12月15日（日）

会場：東北芸術工科大学本館 6 階第一会議室

参加：片桐隆嗣、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、古藤浩、齋藤祥子、  
澤口俊輔、深井聡一郎、三橋幸次、柚木泰彦、吉賀伸、渡部桂

3) 「多重知能 (MI) 理論の基礎を学ぶ」

日時：2014 年 1 月 25 日 (土)

会場：東北芸術工科大学本館 6 階第一会議室

担当：有賀三夏

参加：山崎正明 (北翔大学)

片桐隆嗣、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、古藤浩、齋藤祥子、澤口俊輔、  
深井聡一郎、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦、吉賀伸、渡部桂

4) 「わくわくワークショップ振り返り」

日時：2014 年 3 月 24 日 (月)

会場：東北芸術工科大学本館 6 階第一会議室

担当：矢作鹿乃子

参加：山本一成 (大阪樟蔭女子大学)

片桐隆嗣、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、古藤浩、齋藤祥子、  
澤口俊輔、深井聡一郎、三橋幸次、柚木泰彦、吉賀伸、渡部桂

5) 「レッジョ・エミリア研修報告会」

日時：2014 年 6 月 3 日 (火)

会場：東北芸術工科大学本館 6 階第一会議室

参加：片桐隆嗣、片上義則、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、古藤浩、  
齋藤祥子、澤口俊輔、深井聡一郎、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦、吉賀伸、  
渡部桂

6) 「夏のワークショップ祭 計画発表会」

日時：2014 年 6 月 3 日 (火)

会場：東北芸術工科大学本館 6 階第一会議室

担当：片桐隆嗣、遠藤節子、青山ひろゆき

参加：片上義則、有賀三夏、木原正徳、古藤浩、齋藤祥子、澤口俊輔、深井聡一郎、  
三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦、吉賀伸、渡部桂

7) 「夏のワークショップ祭 学内外合同振り返り」

日時：2014 年 8 月 17 日 (日)

会場：こども芸術大学 2 階会議室

参加：大島伸矢、阪井和男、戸田博人、森憲一  
片桐隆嗣、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、古藤浩、齋藤祥子、澤口俊輔、  
矢作鹿乃子

8) 「夏のワークショップ祭 検証報告会」

日時：2014年9月22日(月)

会場：東北芸術工科大学本館6階第一会議室

参加：戸田博人

片上義則、片桐隆嗣、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、古藤浩、  
齋藤祥子、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦、吉賀伸、渡部桂

9) 「インストラクショナルデザイン勉強会」

日時：2014年9月22日(月)

会場：東北芸術工科大学本館6階第一会議室

参加：戸田博人、片上義則、片桐隆嗣、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、  
古藤浩、齋藤祥子、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦、吉賀伸、渡部桂

10) 「レッジョ・エミリア研修報告会」

日時：2015年5月29日(金)

会場：東北芸術工科大学本館6階第一会議室

参加：原田康也

片上義則、片桐隆嗣、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、齋藤祥子、  
深井聡一郎、早野由美恵、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦、渡部桂

11) 「芸術思考の考察についてのレクチャー」

日時：2015年5月29日(金)

会場：東北芸術工科大学本館6階第一会議室

参加：原田康也

片上義則、片桐隆嗣、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、齋藤祥子、  
深井聡一郎、早野由美恵、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦、渡部桂

12) 「2015秋のワークショップ振り返り」

日時：2015年9月19日(土)

会場：やまがた藝術学舎

参加：有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、古藤浩、早野由美恵、柳田哲雄、  
矢作鹿乃子、柚木泰彦、渡部桂

13) 「2015 冬のワークショップ振り返り」

日時：2015 年 11 月 28 日(土)

会場：やまがた藝術学舎

参加：長南博昭

有賀三夏、古藤浩、深井聡一郎、柳田哲雄、吉賀伸、矢作鹿乃子

14) 「アンケート分析結果報告会」

日時：2015 年 12 月 16 日(水)

会場：東北芸術工科大学本館 6 階第一会議室

参加：阪井和男、戸田博人

片上義則、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、深井聡一郎、  
早野由美恵、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦、渡部桂

15) 「2016 新春のワークショップ振り返り」

日時：2016 年 1 月 23 日(土)

会場：やまがた藝術学舎

参加：有賀三夏、吉賀伸、柳田哲雄

16) 「2016 春のワークショップ振り返り」

日時：2016 年 3 月 23 日(水)

会場：こども芸術大学 2 階会議室

参加：阪井和男

片上義則、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、古藤浩、深井聡一郎、  
早野由美恵、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦

17) 「アンケート分析結果報告会」

日時：2016 年 3 月 23 日(水)

会場：こども芸術大学 2 階会議室

参加：阪井和男

片上義則、有賀三夏、青山ひろゆき、遠藤節子、木原正徳、古藤浩、深井聡一郎、  
早野由美恵、三橋幸次、矢作鹿乃子、柚木泰彦



## <別添資料3>

### 新聞掲載記事一覧

No.	年度	日付	新聞	タイトル
1	25(2013)	10月5日	山形新聞	芸工大・教育研究プロジェクトが始動 芸術で「生きる力」育む
2		12月26日	山形新聞	子どもの生きる力育む芸術思考 可能性 シンポで考える
3	26(2014)	8月12日	読売新聞	頭と体 動かし挑戦「世界一遅い球転がし」
4		3月26日	山形新聞	新聞紙使いワークショップ・芸工大 できた!!カラフル衣装
5	27(2015)	11月27日	山形新聞	東桜学館の授業開発 県教委 芸工大と連携協定
6		11月27日	朝日新聞	「探究型学習」芸工大と推進
7		11月28日	読売新聞	県教委 芸工大と連携協定 課題探究型学習を推進
8		2月16日	山形新聞	主体的な学習方法体験
9		3月4日	毎日新聞	自ら解決する力育む 東北芸工大探究型学習研究会

<別添資料 4 >

外部評価書

No.	所属	職位	氏名
1	山形県教育委員会	前委員長	長南博昭
2	山形大学大学院教育実践研究科	教授	渡部泰山

## 平成 25 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」中間報告・外部評価書

前山形県教育委員会委員長 長 南 博 昭

1. 本研究は、最終的に「学習指導要領」が掲げる「生きる力」を育むことが「ねらい」である。私たち人間は、この力を持っていればすべて上手に生きていくことができるのである。この力を育むためには「前提条件」がなければならない。それは「壁(ショック)」である。子どもが何かに取り組んでいるときに「どうしてもできない!」とか「困ったことになってしまった!」「悔しい!」という気持ちを持つこと、これが「壁」である。すなわち「壁に当たった」ということである。この壁に当たるということが今の子どもたちには極めて少なくなっている。壁に当たったときに、「どうしよう」何かを「しなければ!」という気持ちが出れば、「生きる力」の育成につながる道筋に入るのである。
2. そのスタートを「何で」行うのが「ポイント」であり、「壁」を意識させる取組を本研究では「WS ワークショップ」を取り上げている。そして、その活用の方向づけに「芸術思考」と「デザイン思考」を採用していることである。これらを基本に総合的に教育方法を確立しようとしている点が「新たな研究」になっていることである。そして、芸術分野にアンケートによる「多重知能理論」の8領域によって「可視化」する方法は画期的な手法であり、今後の研究に特に期待したい部分である。しかも、このWSは、学生とともに進んでおり、学生にとっても有益な経験をすることができる。この点もこれまでの研究には少なかったことである。また、「行動観察」によってWSを形成的な評価を行っており、「多重知能理論」の各領域の達成評価にしていることも素晴らしい取組である。ここまでくるのに時間は3年かかっている。しかし、これを「きっかけ」にして、このあとの2年間で、必ずや成果に結びつくものと推測する。
3. 本研究は、「創造性」という領域を取り上げて、技術面では捉えにくい部分を数字に置き換えて、それを「教育」に落とし込むという手法を取り入れている。この部分がこれまでの研究にはあまり無かったことであり、挑戦的であると言える。自分の「発見」や「ひらめき」を発展させ、どこにつなげるか、頭の中でイメージを感じ、それを様々な活動につなげていくものが「創造力」である。子ども自身の豊かな体験を重ねることが、子どもに「生きる力」を育ててくれるのである。したがって、本研究は、これから本番の取組であり、是非成果に結びつく方法を解き明かしてもらいたい。
4. これまでの3年間では、予算の積み残しが課題になっているが、研究の進め方においては、組織面での課題もあるようで、事務と研究が一体的に運営できなかったことと、事務担当者の意識がずれていたのではないかと思われる。そして、予算の積み残しは普通ではないことである。しかし、このあとの2年間の研究で、国際シンポジウムの開催

やその他の委託料の増配分など、または計画の見直しによって、これを解消していく必要があるのではないか。

5. この研究の計画書に、「国際シンポジウムの開催」が予定されている。このことは来年度早々に実現してもらいたいことであり、「多重知能理論」の実証性を確認することも必要である。また、ハーバード大学との将来的なつながりをつけるためにも、そして、「多重知能理論」の良さを理解するために、また連携を進めるためにも「国際シンポジウム」の開催は必要である。この研究は、日本にとっても、教育にとっても、芸術領域にとっても、未来への可能性を持っているものである。今後もこの研究を持続し、しかも文部科学省の支援も得ながら、芸術分野での「新たな観点」が見出されることを期待するものである。
7. WS も来年度からは、市内小学校で行うことが決まっており、これまでの大学でのWS よりもさらに実証性が確認されるものと推測する。この研究のすばらしい点は、「連携・協働」によって進められていることであり、今後はさらに強化していく必要がある。

以上、この研究は、芸術大学の重要な取り組みがたくさんあり、それがポイントである。

「これからの2年間」で是非成果を出してもらえることを期待する。

平成 25 年度選定文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
「生きる力を育む芸術・デザイン思考による創造性開発拠点の形成」中間報告・外部評価書  
山形大学大学院教育実践研究科教授 渡部泰山

この研究は、東北芸術工科大学の設立構想・設立理念を基盤とし、芸術大学の特色を最大限に生かした「芸術思考」及び「デザイン思考」を活用した新しい教育方法の構想、実践及び確立にある。それは、従来の人間の能力や知能の概念を一層深く掘り下げ、ワークショップの方法論を実践、検証しつつ、身体、社会、空間、論理数学、言語知能の領域を統合するプログラムの開発を目指した実践的研究であり、新しい時代を創造的に建設していくための知の認知革命とも言うべきものである。

研究組織の拠点として創造性開発研究センターを設置し、ここに 41 名にも及ぶ研究者を擁した「学際性」「実践性」に富む研究体制を整備した強みがある。しかも、研究の理論化を進めるグループと分析担当グループに分け、また、多重知能に対応する 5 つのワーキンググループを組織しつつ、学校教育グループと外部評価グループを配置したことは、より実証的研究としてその方向性を確かなものとしている。ただ、この強みとも言える研究体制あるいは研究員が、研究成果、研究発表論考を勘案したとき、必ずしもこの研究プロジェクトの目的も方向性に収斂された研究実践、成果として積み重ねられ、課題分析・評価を踏まえた更なる共同研究の高みへと共通認識に至っているのかどうかについては、やや統一性が欠如している印象は免れない。研究自体、極めて独創的、かつ実験的要素も多々あり、安易な評価を下すのは尚早であり、今後の研究で予定されている創造性開発拠点(芸術学舎)の活用と新たな展開、国際的公開型研究シンポジウムの開催等、順調に計画されている進捗状況を勘案し、大いに期待すべきものとする。

研究プロジェクトの進捗を省察したとき、特筆すべき実践成果として小中学生を対象としたワークショップが 41 回実施され、行動観察及び多重知能の推定、仮定に基づく分析と可視化が行われていること、知能アンケートが実施され自己評価、成長感情評価が多面的に実践されている。その分析を通して研究者と参加者が、更なるデザインの方向性、密度を検証しあえていることである。また、理論成果として各大学教育研究会、学会、シンポジウム等において、数多くの学術的研究発表が行われ、受賞を受けていることなど、先行研究としての評価は、確実なものとして展開している。こうした独創的視点を加味した研究実践が、創造性開発モデルとして新しい実りをもたらすことが期待できる。ただこうした研究が、ただ単に学術的価値にとどまることなく、学校教育の現場と密接に接続しつつ、広く一般市民、社会全般にも周知、還元されていく手立て、研究の質と方向性の確保が課題として指摘できる。予算執行率の低位な状況を鑑みたとき、研究が必ずしも順調に進捗しているとは言えない。当初の研究計画を再度練り上げ、今後の研究方針及び展開を着実に推進し、「生きる力」の能力の多面的研究が、新たな時代の創造に寄与できることを確信するものである。